

グビ姉vsビールバカ、 霊峰富士の聖杯大決 戦！

三流FLASH職人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

山梨県、富士川松ぼっくりキャンプ場に初日が昇る時、富士の頂の聖杯に金色の酒が輝きを放つ・・・人はそれをダイヤモンド富士と呼ぶ。

その聖杯を押し頂くのは山のグビ姉こと鳥羽美波か。それとも海のビールバカ、小谷さやかか。

10年の歳月を経て二大酒乱教師、ここに再臨！

※本作は作者別作品、グビ姉vsビールバカ、南海の大決戦！の続編です。前作も合わせてお楽しみいただければ幸いです。

あと映画“ゆるキャン”のネタバレ多数ありますのでご注意ください。

目次

92

第1話 大チャンスは大ピンチ？

1

第2話 10年前の忘れ物 12

第3話 本領発揮！ 23

第4話 大人の時間 33

第5話 いざ山梨！①大野真 44

第6話 いざ山梨！②黒岩悠希 52

第7話 いざ山梨！③鶴木陽渚 63

第8話 約束の日の出 74

第9話 いざ山梨！④帆高夏海、湯浦し

ずく、そして・・・ 84

第10話 ケンカが出来ない相手。

第11話 ぼーいみいつがる 101

第12話 キャンプファイヤーと大晦日

の夜 113

第13話 だからアウトドアは素晴らし

い 122

第14話 グビ姉vsビールバカ、霊峰

富士の聖杯大決戦！ 133

第15話 振る舞い鍋であつたまろー。

第16話 大人のけじめ 145

第17話 レッツゴー！ワカサギ釣り。

166

第18話 となりのとなり | 176

第19話 ビバーク新年号 | 185

第20話 しやちほこさんぽ1月号

195

最終話 本栖高校野外活動サークルと海

野高校ていぼう部 | 205

あとがき | 217

第1話 大チャンスは大ピンチ？

『年末年始、山梨そっちに行くから。』

SNSのチャットに伝言が入る。それを受信した各務原なでしこ、大垣千明、犬山あおい、

そして斉藤恵那がそれぞれの場所で、ぐっ！とガッツポーズで笑顔を見せる。

彼女たちの友人である志摩リンからの報告、かねてから約束していた年越しキャンプへの

全員参加がこれで確定したのだ。

山梨県、富士川松ぼっくりキャンプ場。

高校時代に「キャンプ同好会」「野外活動サークル」に所属していた彼女たち。社会人になり

付き合いも希薄になりつつあったのだが、思わぬ縁から再び集結する事になる。

— キャンプ場を作る —

このとんでもないプロジェクトが山梨県観光推進機構所属の千明から発案され承認されたのだ。

リンの一言をキツカケにかつてのキャンプ仲間が集結し、その夢の実現に向かって様々な

行動を経て、ついに1年後、新たなキャンプ場の設立を成し遂げたのだ。

秋、そのこけら落としの日に、彼女たちは年末にまたここに集まってキャンプをしようとうと

約束していた。なにしろこのキャンプ場の最大のウリは年末年始時期に見られる

“ダイヤモンド富士”という富士山山頂から顔を覗かせる朝日なのだ。是非初日の出にそれを

みんなで見ようというわけだ。

ただ名古屋の雑誌社勤務のリンだけは休みが取れるか不透明で、今日まで返事を保留に

していたのだが、これで無事全員参加ができることに相成った。

『いよいよし！新年ダイヤモンド富士初日の出キャンプ、これで開催だぜ！』
『ウチとアキはスタッフやけどなあ。』

千明に続いてあおいがそう返す。彼女らはこのキャンプ場の運営スタッフのメンバーでもあり、

特に地元在住の千明、あおいの二人は仕事として来客の案内、管理も度々務めている。

『私もお手伝いしますから安心して!』

『もちろん私も頑張るよ。』

なでしこと恵那もそう続く。自分たちが楽しむのも勿論だが、訪れる人たちにキャンブの

楽しさを堪能してもらうのも、彼女たちにとっては大きな喜びなのだから。

『ま、私は仕事だけだな。』

「「えええーっ!?!」」

リンの返信に、全員がスマホを持ったまま驚きの声を上げる。今さっきこちらに来れるって

言ってたのに・・・仕事とは？

『今週末に帰るから、その時話すよ、重大発表。』



「ビバークが、来る!」

役場のプロジェクトルーム。封筒に入った資料と共に、彼女たちにはすっかりお馴染みの

雑誌をどん！、と叩きつけるように置くリン。

「な、何だつてえーっ！？」

「ビバークつて、あのビバークなん？」

千明やおおいが口をM字型に開いて驚くのも無理からぬ事、アウトドア専門雑誌“ビバーク”は

キャンプ好きなら知らぬ者がいないほどの超有名雑誌、事実上このジャンルの1強といえる

ブランドなのである。

リンいわく、彼女の勤務先の雑誌やWEB版に載せている松ぼっくりキャンプ場の記事を見て

ビバークのスタッフが是非合同取材をと申し出て来たとの事だ。お馴染みのダイヤモンド富士に

加えて、高校時代からのキャンプ同好会の女子達が立ち上げ作り上げたこのキャンプ場は

大手雑誌にとっても魅力的なコンテンツのようだ。

「凄い凄い！これで松ぼっくりキャンプ場も全国区だよ!!」

「これは人気出るねえ、予約殺到するよ、よかったねあきちゃん。」

嬉々とする4人。結局こういった観光地にとって話題作りは最重要課題、その最善の方法が

むこうから転がり込んできたのだから無理もない。が、リンだけは難しい顔をして、こう切り出した。

「それでだ、大晦日と新年の取材に向けて、なにか目玉になるような企画が欲しいんだ。」その言葉に全員がえっ？という顔をする。元々キャンプ場創設時から様々な企画を盛り込んで、途中で土器が出土してからはその要素まで取り込んだあそこに、さらに何か

追加要素が必要だと言うのか・・・？

「ダイヤモンド富士ならビバークはもう飽きるほど特集している、出土品の展示やドッグラン、

キッズスペースも特に珍しいというわけじゃない・・・何かこう、雑誌映えする企画があるんだよ。」

雑誌社ライターのリンの言葉には重みがあった。確かにあの全国誌で特集を組むなら

何かもう一押し、企画映えする絵が欲しい所だ。難題に全員がうくん、と頭をひねって考え込む。

家でまったり、つていうパターンが多いらしいわ。」

「ダイヤモンド富士を見る人はまあ大抵、当日車やバイクで見に来るからなあ……冬キャンプで

泊ってまでここで見るようなストロングスタイルな人はなかなかいないらしくて……」

加えて松ぼっくりキャンプ場は、元旦と言う日時を考慮した場合にあまり人を呼ぶのに

向いていないのもある、近所に神社仏閣は少なく初詣と兼用と言うのも難しいし、

何より冬の山梨の山岳部、雪でも降れば車での移動も一苦労になる、特に雪の少ない遠方の

お客は二の足を踏んでしまうだろう……付け加えるなら付近に温泉も無いのも痛かった。

うむむむむ、と腕組みして悩む一同。せっかくのこのチャンスで失敗してしまえば、もう次の機会は望むべくも無いだろう、松ぼっくりキャンプ場の大きな岐路がいきなり来てしまった。

「じゃあ、なおさら人が呼べる企画を考えないといけないねえ。」

恵那が指を立ててそう提案する。元々広報担当として活躍した彼女だけに、ここは一

念発揮

して皆に提案を促す。ペンを取り、ホワイトボード最上段に“元旦集客企画”の文字を記す。

「そうだ！元旦なんだから、甘酒や雑炊の振る舞いをするのはどうかな？」

料理の腕には自信のあるなでしこがそう提案するも、それはすでに千明たちによつて確定している企画だった・・・まあ何を出すかまではまだ決まっていけないが。

「よし！あのキャンプ場に温泉を掘り当てて！」

「できるかい！出たとしても設備が間に合う訳ないやろ!!」

千明の提案はあおいのチョップによつて却下された。

「じゃあ初詣用の神社を作ろうよ。」

「・・・何を奉る神社だよ！」

「もちろん、ちくわ。」

「おいこら待て！ちくわまだ生きてるだろ!!」

恵那のギャグのような提案を必死で否定するリン。かつて名犬早太郎しつべい太郎を奉る神社で

その3代目に会いに行くも既に他界していた経験がある彼女にとって、犬を奉る神社と言ふのは

どこか縁起が悪い印象があった。

「もちろん、生き神様だよ。」

あつけらかんと返す恵那に、どっちにしろ却下だと結論付けるリン。そもそも個人の考えで

神社が設立できるわけ無いし……

「この時期の冬山のウリゆうたら……やっぱスキーかな？よっしゃ！スキー場作るで！」

「あ、それいいよあおいちゃん！整地してスロープ作って雪が降ったら、子供がソリで下るくらいミニスキー場出来るかも！」

ナイスアイデアに向かい合って両手を合わせるあおいとなでしこ。が、千明がメガネを

くいっ！と上げてそのアイデアを否定する。

「あそこにもう重機が入れないのは知ってるだろ……土器が出た以上は、な。」

あ、そうだった……と消沈する一同。縄文時代の土器が出た以上は、もう草刈りをするにも

神経を使う程のデリケートな土地になっているのだ、大掛かりなスロープを作る土地改造は

出来そうになかった。

むむむむむむむむ……

全員が難しい顔をして悩む。あそこに大晦日に人を集め、なおかつ全国有名誌の紙面を彩る

企画を考えねばならないのだ、しかもあとひと月足らずの間に・・・

と、その時。

—ヴーッ、ヴーッ!—

—ぴろりん♪—

—キンコーン—

—ピピピピピピ—

と
全員のスマホに一齐に着信が入った。そのあまりのタイミングの良さに、何事かな?

顔を見合わせ、スマホを取り出す。

それは、この物語を成^{ハッピーエンド}功に導く鍵となる、最初のキツカケ。

あの暑い夏の思い出、ほんのひと時邂逅した、はるか遠い南国にいる懐かしい親友たちからの

嬉しすぎるメッセージ。

「友あり！遠方より来たるーーーーっ!!」

立ち上がり、ガッツポーズを掲げながら叫ぶ千明に、皆が追隨してがたがたと席を蹴り、

スマホを天井に向けてかざす。

「おおおおおーーーーっ!!!」



同時刻、山梨県本栖高校の職員室、鳥羽美波教員のスマホにも着信が入る。それはかつて

遙か南の地で出会った懐かしい友人からのメッセージ。未だ彼女のスマホに下がる、フェルト製のストラップ、美波と共にビールを掲げて上機嫌の女性、その人からの10年越しの“遠き約束”の実現――

第2話 10年前の忘れ物

ふくおか
福岡県某所、とあるインテリアコーディネイトの会社にて。

「ふーっ、と。お疲れ様です。」

デスクを立ち、荷物をまとめてタイムカードを押した女性・・・というには顔も体も幼さの残る

人物、鶴木陽渚つるぎひなが事務所の面々に終業の挨拶をする。

「おー、お疲れさん鶴木ちゃん。週末は芦方へ帰ると?」

「はい。懐かしい先輩が帰ってきますので、久しぶりに会いに行くんです、植木さんは?」

「あー僕は特に予定はなかねえ、ま、また街をぶらぶらすつさ。」

陽渚は高校卒業後、建設設計士の父親のすすめもあつてこの会社に就職していた。

元々手芸が趣味だった彼女にとって、部屋のカーテンやカーペット、テーブルクロスなどの

デザインを手掛ける仕事はびたりハマっていた。

ちなみに彼女の上司である植木もまた陽渚と同じ海野高校の出身者である。5歳年上の彼は

かつて高校の手芸部で全国コンクール金賞を取った事もあり、その後の海野高校男子に

手芸部ブームを生み出した張本人だったのだ。お陰で手芸部に入部しようとした陽渚に

二の足を踏ませ、結果として釣りクラブである“ていぼう部”への定着を果たすことになる。

そのていぼう部時代の先輩、大野真おおのまことが久々に芦方に帰って来るとの報告を、入部時の部長である黒岩悠希くろいわゆうきがメールで知らせて来たのだ。

大野は海洋調査員になる夢を叶え、一年の大半を調査船に乗り込んで過ごしているので、

帰港した時でないと会う事もできない、なのでこの機会にぜひ集まろうとの黒岩の呼びかけに

乗ったわけだ。

「夏海の家に集合かー、ますますていぼう部時代を思い出すよ」

10年来の付き合いの仲間たちとの再会に、思わず顔もほころぶ陽渚。だがその会合

が

思わぬ方向に動き出すことになるとは予想もしていなかった。

◇

◇

◇

「おー陽渚、久しぶりー。」

「陽渚ちゃん！元氣だった？」

翌日。熊元県芦方町、喫茶店“ほだか”に入った陽渚を、この店の娘である帆高夏海ほだかなつみと、

海洋調査から帰還した大野が嬉しそうに出迎える。

「大野先輩！ホントお久しぶりです。」

大野に駆け寄った陽渚がその手を取ってぶんぶん振り回す。彼女にとって夏海は幼い時からの

親友であり、芦方に帰ってくるたびに顔を合わせていたのだが、大野とはもうかれこれ2年ほど

会えていなかったのだから感激もひとしおだ。

「しっかし大野先輩と並ぶと・・・陽渚はホント変わらねーなあ。」

確かに大野は長身でグラマー、陽渚は子供体形で童顔なこともあり、とても一歳違いには見えない。

「人の事言えないでしょ。」

ほっぺを膨らませて抗議する陽渚。夏海もまたあまり身長に恵まれず、大野といるとどうしても

見た目の幼さが目立ってしまう、それでも陽渚に比べるとどこか色気を感じる部分はあるが。

夏海は教育大学に進学して体育教師になっていた。奇しくも彼女らの母校である海野高校に

配属になり、現ていぼう部の顧問も務めている。なんでも前顧問の小谷さやかが結婚を契機に

教師を引退する際、夏海を後釜に推薦していたらしい。

「私は結構モテるもんねー、生徒からラブレターとかしよっちゅう貰うし。」
へへーん、とない胸を張って自慢する夏海に、思わずジト目を返す陽渚。

「保健の先生がそれでいいのかな・・・」

と、カランカランと店のドアが開く音がして、これまた懐かしい人物が入って来た。

「おーよしよし、みんな来とるね。」

「お久しぶりー。」

ていぼう部元部長の黒岩と元顧問のさやかが並んで入って来る、これで10年前のていぼう部メンバー勢揃いだ。

「先生お久しぶりです、結婚生活はどうですか？」

興味津々でさやかに問いかける陽渚。あのビールバカとまで言われた酒乱女性がどんな

夫婦生活を送っているのかは聞いておきたい所だ。

「まあ上手くやってるわよ。子供ももう小学生だし、手が掛からなくなって助かるわあ。と、いうわけで、この後飲みに行かない？鶴木ちゃん。」

「まだ昼間なんですけど・・・」

小谷さやかの実家は米農家だが、長男が家を継がずに事業を起こしたのもあって、さやかが

婿養子を貰って家を継いでいたのだ。少し離れた農家の三男坊とお見合い結婚したのだが、

その彼が予想以上のイケメンかつ体力馬鹿だったこともあり、結婚とその後問題なく

農家を営んでいた。

ただダンナは典型的な下戸であり、さやかにとって晩酌の相手にならないのは悲しかった。

他は完全な九州男児なのになんでよりによって・・・と新婚時に嘆いていたのはみんなの笑い話のタネだった。

そんなわけでさやかは事あるごとに呑み友を探しており、意外にもかつての教え子の陽渚が

「さて、全員そろったね。」
ソファーにもたれて一同を眺める黒岩。早速靴下を脱いでアグラをかいているのは相変わらずの
イケるクチなのを知って以来、会う度に呑みに行っていたりするのだ。

「これで全員なんですか？今回は。」
行儀の悪さだ。

大野がいぶかしげにそう尋ねる。今までも何度かていぼう部OGは集まる事はあったが、

その際は陽渚や夏海の後輩達も顔を見せることもあったのだが・・・純粋に10年前のメンツ限定を

わざわざ集めたのは一体どういう意図なんだろうか。

ふっふっふ、と怪しく笑う黒岩。こういう時の彼女は何らかの悪知恵を働かせている事が多い。そんな時、陽渚は決まって彼女にキツネ耳とシツポがあるイメージが浮かぶ……

まさに女狐だ。

カバンから一冊の雑誌を取り出した黒岩が、テーブルの上にその本を置く。

黒岩悠希は高校卒業後、フリーの雑誌ライターとして活躍していた。田舎のローカル誌の記事を

書くべく東へ西へと飛び回り、取材と旅行を兼ねた生活を続けているのだ。なので彼女が雑誌を

見せた時も、一同はただ単に彼女が書いた記事が載っているのかな？としか思わなかった。

「キャンプ特集……しゃちほこ出版？」

「名古屋の本ですか？何か記事を……」

夏海と大野がそこまで言った時、全員が一斉にフリーズする！

本の表紙には、作業着を着た5人の女性がまるで戦隊モノのようなポーズをとっていたのだ。

そのシニールさは置くとして、彼女たちは知っていた！その本の表紙を飾る面々を！さらにキャンプというワードが、他人の空似という可能性を完全に掻き消して！！

「野クルのみんなだーっ！！」

10年前の夏、はるか遠くの山梨県から合宿に訪れて、共に釣りキャンプを楽しんだ仲間達、

自分たちに負けず劣らずの個性派集団で、わずか3日の邂逅で親友と言える間柄になった。

釣りと魚と戯れて、寝食を共にして、そして別れを惜しんだ。再会を誓ってバイトを始め、

今度はこちらから会いに行くよ、と約束をして。

だが、それは実現しなかった。その冬に世界的な流行を見せた伝染病、新型コロナウイルス。

正体の見えない未知の病の恐怖から、国はもちろん都道府県をまたいだ移動すら制限されてしまう。

当然熊元から山梨までの旅行など出来るはずもなかった。ようやく移動制限が緩和された

3年後にはもう彼女たちもそれぞれの生活があり、今更集まって山梨まで行ける状況では

無くなっていったのだ。

そんな10年前の忘れ物。それが今日の前にあった・・・まさかの雑誌と言う形で！
かぶりつくように本に見入る一同。なんと彼女たちはさびれた施設を自分たちで改造し、

見事にそこをキャンプ場として再生させて見せたのだ・・・それぞれの生活の合間を見て

草を刈り、地ならしをして、環境を整え、企画を考案し、土器の出土による中止と言

う
困難まで乗り越えてその事業を成していたのだ。

「すっげえなあ。」

「本当、バイタリテイありますねえ相変わらず。」

思わずため息と共にそうこぼす夏海と大野。その横で陽渚はかつて自分がいぼう部に入部する

直前の事を思い出していた。

(ていぼう部ってなに？キモくない・・・堤防作るの?)

クラスメイトが部活案内のプリントを見ながらそう話していたのを思い出す。まさかそんな

わけ無いじゃないと思っていた、たかが女子高生が自分たちの楽しむ場を“作る”なんて。

だが野クルのみんなは本当に自分たちでキャンプ場を作ってしまったのだ。本当に

すごい人たちだ……。

「と、いうわけで、10年前の約束を果たしに、山梨に行っけんど……参加する人々」

「はいっ!!!」

黒岩の言葉に陽渚が、夏海が、大野が、そしてさやかまでもが一斉に手を上げる。

彼女たちは今もキャンプ道を楽しんでいる、極めている。ならば私たちもせめて

果たせなかった約束ぐらいクリアしておこう。何よりまたあの懐かしい彼女たちに会って

同じ時間を共有したい、彼女たちの成した偉業をこの目で見てみたい、心からそう思うから。

「じゃあ、いつかの野クルに習って一斉にメール送るばい。」

そうだ、確か修学旅行でこちらに来るとメッセージを貰った時、彼女らはそれぞれの相手に

同時にメールを送って来た。ならばこちらもその「お返し」とばかりにメッセージを送ろう、

意志を伝えよう！

『キャンプ場設立おめでとう！正月にそっちに行くばい。』

『噂のダイアモンド富士、見に行くよ〜』

『キャンプ場作るなんて凄いです、是非お邪魔させてください。』

『大垣さん、みなさん、遅くなったけど会いに行きます！』

黒岩が恵那とリンに、夏海があおいに、大野がなでしこに、そして陽渚が千明に、メッセージを

スタンバイさせる。その横ではさやかも鳥羽先生にメッセージの準備をする。

『10年前の約束、覚えてますか？また楽しく呑みましょう！』

「そんじゃ行くばい・・・3、2、いちっ！」

——そーしんっ!!!——

第3話 本領発揮！

「よおーし！これで大晦日泊のお客、5人獲得っ！」

「それでもまだガラガラだけどな。」

懐かしの友人たちの参戦を取り付けてテンションの上がる千明をリンが冷酷にたしなめる。

大手雑誌ビバークの取材を控えて、満員とはいかないまでも当日の予約を8割は押さえて

おきたい所だ。満杯で約35組100人が目安として20組弱は欲しいのだが・・・
「やっぱ何か企画が欲しいよね。」

「二応元日の振る舞い雑炊は告知しとるんやけど、他の神社や温泉でもやつとるしなあ。」

うーむ、と頭をひねる一同。と、その中で恵那だけがスマホをいじってメッセージを送信し、皆に向き直ってこう発言する。

「浮かばないなら募集すればいいんじゃない？」

彼女が送った相手は、先程着信した白州九州のていぼう部OGの面々へのもだった。

『HELP!企画アイデア大募集中。』

「待て待て、彼女たちは仮にもお客だぞ……ゲストに手間を取らせるのは……」

「ーピコン!ピコポコンペンコンヴーッ!ー」

「うおっ!」

言いかけたリンのセリフを怒涛の着信が遮る、思わずスマホの画面を見た全員が、

そのメッセージを流し見て思わず顔をほころばせる。

『なにになに? 私たちで考えていいの? 採用されるの?』

『ぜひぜひ!色々考えてみたいです。』

『協力させてください、せっかく参加するんですから。』

『とりあえず何が決まっとつと?』

……なんかもうやる気マンマンなのが文体と返信の速さからピンピン伝わって来る。

彼女たちは知る由も無いのだが、スマホの向こうのていぼう部OG達は、自らキャン
プ場を

立ち上げたこちらの成果に対して、自分たちは未だに“山梨に行く”という約束すら
果たせていない事に引け目を感じていたのだ。そこにきて協力の要請が来たとなれ
ば

向こうの面々が一念発揮するのも無理からぬ事なのだ。

そんな熱意に打たれて、リン達一同も事情や現状を報告し、何かいいアイデアはないかと

頼み込んでみる。

『一応、振る舞い鍋はやることになってるんだけどなあ……それだけじゃどうも弱くて。』
千明の送信に対する返信は速攻で帰って来た！

『んじゃ、またこっちの魚持ち込むつか？』

その返信に一同が口を開けて固まる。かつて芦方で堪能した南国^{九州}白州の魚介鍋を冬の山梨で振る舞いとして出せるとなれば……

「おおおーっ！すげーい、それすげーいよ!!」

なでしこが目を輝かせて絶賛する。思えば松ぼっくりキャンプ場のテストキャンプでも

鮭スープから石狩鍋のコンボを堪能したのだが、どうも冬の魚介料理と言うとどうして

も。北海道の鮭やカニ、富山のブリや秋田のハタハタなど、目線が北の方に寄りがちになる。

そこにまさかの南国九州の地魚料理の振る舞いとなれば大きな目玉になりそうだし「だが待て、そうなるのかなりの量が必要になるだろ……予算がなあ。」

千明が冷や汗を流して皆を制する。なにしろ松ぼっくりキャンプ場にはかなりの予算が

投入されており、正月だからと特別予算を計上するのはかなり厳しい状態なのだ。

『食材の確保と送料で、予算どんだけかかる?』

すかさずメツセージを送るあおい、彼女もまたその心配が真っ先に頭に浮かんで、

千明の発言と同時にメツセージを打ち出していた。

ピコン!

『ふっふっふ、私たちは〃何部〃でしたっけ?』

あおいの問いに夏海が返事を返す。思わずあつ!と口を開けて固まるみんな。

『今は冬釣りの時期だから、任せて下さい!』

『ガラガブにメバル、グレにチヌ、シーバスに青物、アオリイカにヤリイカ、もちろんアジも。』

『保存と輸送もアテあつけんね、心配無用たい。』

『と、いうわけで、費用はプライスレスですっ!!』

『お・・・お前らあゝ』

スマホを握りしめて感激する千明。その鼻から思わず赤いものが垂れる。

「あ、アキッ!鼻血出とる!」

「鼻血の発動条件が昔と逆になってる・・・」

ティツシユを鼻に詰める千明を見てリンが思わずこぼす。かつては大金を使おうとした時に

興奮して鼻血を出していたが、大人になった今はタクシーで名古屋から富士川町に至るまでの

料金メーターとにらめっこしてる時すら鼻血は出なかつたのだが・・・

『一度先行して少しお魚を送ります、それで出す料理を研究されてはいかがですか?』

大野がそうメッセージを送つて来る。確かにぶつつけ本番で料理して失敗したら大惨事だ。

そんな事まで気遣つてくれる遠くの友人たちに心からの感謝を返す一同。

そんな中、リンは意を決して文章を打ち、少しためらつた後に送信する。

雑誌ライターという職業病に対する自己嫌悪に、はあとため息をついた後、やや自虐的に

こう嘆いた。

「さすがに厚かましすぎるかな・・・」



「ほーうー! ビバークが取材に来るっとか。」

九州
臼州は芦方、喫茶店ほだか店内。黒岩はリンからのメッセージを眺めて、なるほどと納得の息を吐く。

「ビバークって、あのアウトドア雑誌だよな。ひよっとしてユウ姉、コネでもあるの?」
「うんにゃ、あたしみたいな駆け出しのフリーには雲の上の存在たい。」

夏美の問いに首を振って返す黒岩。なるほど向こうがアイデアを寄こしてと頼んできたのは

そのせいなのか。確かにあの全国誌を彩るなら企画からして練る必要があるだろう。

『それで・・・もしよかったらだけど、みんなにも顔出しをお願いしたいんだけど・・・』
続くリンのメッセージにはそう書かれていた。それを見て今度はこちらが口を開けて

固まる番だった。

「え、えええーっ!?」

「やった! 雑誌に載れるっ!!」

「これはコメントを書き留めておかないと・・・海なし県と海洋汚染の関係と関心と・・・」
驚く陽渚に嬉々としてはしやぐ夏海。大野は何か別の方向に思考が行ってそうだが。

「そーいや志摩さんも雑誌のライターやったね・・・ウチらを記事のネタにする気ばいね。」

えっ?と言う顔をして黒岩を見る一同。私たちを・・・話のネタに?

「10年前に釣りとキャンプで出会った女子高生が、今また自分たちでこしらえたキャンプ場で

再会を果たす・・・そんな記事を提供したいんやろね。」

あー、そういう事か、と皆で顔を見合わせる。確かにていぼう部釣も野キャンクルも女子高生の

活動としてはかなりレアなものだ、そんな彼女たちが10年振りの邂逅となれば、アウトドア雑誌の

記事としてはかなりオイシイものになるだろう。

「なんか・・・恥ずかしいかも。」

陽渚が困り笑顔で頬を掻く、昔から引つ込み思案だった彼女には少しハードルが高いが・・・

「はいあたし賛成。ていぼう部のいい宣伝になるし、これで来年の新入部員も

バツチりだよ!」

夏海が挙手をしてにかっ!と笑う。近年またていぼう部の人数がギリギリで顧問と

しては

頭が痛かったのだ。もしあのビバークに載れば来年はさぞかし多くの部員と部費が期待できる。

その言葉にしようがないなあ、と陽渚も首を縦に振る。ていぼう部OGとして今の部員たちに

貢献できるならしようがないだろう。

ちなみに大野は未だに雑誌に伝えるコメントを吟味してぶつぶつとごにやっている。

早く戻って来て・・・

と、喫茶店のドアがカランと音を立てて開く。入って来たのは白みがかつた銀髪で片目を

隠した、いかにもたくましそうな女性だ。

「なにになに〜?いきなり呼び出して・・・さやかちゃんまで。」

「ゆらさん、お久しぶりですっ!!」

湯浦しずく。黒岩の一つ前のていぼう部部长、卒業後すぐに長^{長崎}岐^県の富久^福江^江島^島にある

瀬渡し旅館「こみや」に就職し、ていぼう部遠征合宿の手伝いをしてきた人物。現在

はこの

芦北に帰ってきて漁業組合で働いていたのだ。

さやかなスマホのやりとりと、しゃちほこ出版の雑誌を見て事情を把握したしずくは面白そうじゃん、あたしも参加させてよと笑顔で黒岩の肩を後ろから抱える。

「んじゃ今日から釣った魚の冷凍保存と、山梨まで冷凍車での輸送お願いね〜」

黒岩のしれつと言いつ放つ無理難題に、お前なあ、という顔をしながらも、彼女も

スマホを取り出し、組合の冷凍庫や保冷車の手配をして回る。こういうイベントに対しての

立ち回りの良さは、さすがは元民宿、瀬渡しの従業員だ。

「さって、保管とアシも確保したし、あとは釣るだけだいたい〜」

黒岩のその言葉に、一同がおーっ！と拳を突き上げて立ち上がる。期日までまだ20日以上

あるとはいえ釣りは水物、釣れる時に釣っておかないと確実な確保は保証できない。

「よーっし、まずはたこひげ屋だね！」

釣り具と餌の確保に各々が個別の交通手段で釣具屋に向かう。思えばその店長と山梨の

志摩さんのお爺ちゃんの出会いから私たちの関係は始まったのだ。10年の歳月を経

山梨のみんなに対する最初のアクションは、その原点へと向かう事、なんとも奇妙な

縁である。



その翌日、山梨の役場にて。

「お、おとおおお．．．予約が一晩で15件も入ってる。しかも全員山梨か長野のお客かよ！」

「どんだけ海産物が好きなんだよ、海なし県民——っ!!」

千明が思わず絶叫する。昨日の夜に、元旦での振る舞い鍋の食材が白州九州の海産物と告知した

とたんにこの殺到ぶりである．．．

第4話 大人の時間

「いいですね、それをぜひ採用させていただきます。」

名古屋、しやちほこ出版の会議室で書類をまとめながらそう笑顔で話す人物の向かい側で

ライターの志摩リンとゲストの大垣千明は心でうっし！とガッツポーズした後、立ち上がり、「よろしくお願いします。」と頭を下げる。

全国誌“ビバーク”と名古屋ローカル誌“しやちほこさんぽ”の合同企画である

富士川松ぼっくりキャンプ場の特集にリン達が出したアイデアに、ビバーク側は快くOKを出してくれた。

遠く白州^{九州}の地で、女子高生時代に合同釣りキャンプをした少女達との10年振りの再会、

そんなシーンをダイヤモンド富士をバックに描けばさぞいい誌面が作れるだろうとのリンの提案は

自社の編集長も、大手のライターや編集者にも受け入れられた。

なにより彼女たちが顔出しやインタビューを了承してくれたのも大きい。許可済み

で

高校生の合宿時に撮った写真を見せて回った際の一同の反応も拔群だったし、この見目麗しき

少女達なら今はさぞ美人であろうと、雑誌映えするいい絵に、そして話題になりそうだった。

「ただ・・・これだけだとちよつとキャンプ場の魅力そのものが伝わりにくいですね。」
喜んだのもつかの間、ビバークの編集者から追加注文がなされる。人間ドラマも確か
にいいが

キャンプ場の魅力を伝えるプラスアルファが、あと一さじ欲しいとの事だ。

「ま、あーやってネタを骨の髄まで絞らせるのは大手のお約束だ、上等上等。」

会議終了後、うむむと頬を膨らませて悩むリンと千明に、リンの上司の刈谷がそう
フオローする。

なにしろ取材本番の大晦日までもう一カ月を切っているのだ、いまさら企画がボツに
なる

はずもなく、ここから追加できる企画などたかが知れているだろう。あの発言はあく
まで

あとひとつ何かあれば嬉しいな、くらいのモノらしい。

「まあ何にせよ助かりました、当日はよろしくお願いします。」

編集部の皆に一礼する千明。この会議の為に名古屋まで出張って来た彼女は、とりあえず今夜は

リンのアパートに泊めて貰い、明日イチで山梨に帰る事になっていた。

「うん、志摩ちゃんをよろしくね〜」

「任せて下さいっ!」

刈谷の軽口に、びしっ!と敬礼して返す千明。おいやめろとジト目のリンだが、周囲の面々は

その千明のキャラクターに思わず笑いをこぼす、生真面目な志摩さんといひコンビじゃないかと。

「・・・で、早速居酒屋かよオイ!」

「いやあく、企画通ったし、お祝いお祝い。」

帰社のその足で居酒屋に突入し、早速生ビールとつまみを注文する。千明は社会人になつてから

仕事帰りの居酒屋が基本ルーチンになっていた、もう完全に二代目グビ姉である。

ちなみになでしこ達3人やていぼう部の面々にも企画が通つたことは伝えてある、これ

明日から年末に向けて本格的に動く事になるのだ。

「んじや、友人たちとの再会と企画の成功を祈つて、かんぱーい！」

レモンチューハイを千明のビールジョッキに合わせて一口ぐびり、と飲むリン。

が、そのグラスをことりとテーブルに下ろすと、千明の方に向き直つて一言発する。

「・・・やっぱ、あとひとつ何か欲しい！」

ぷはーっ！とジョッキを空にした千明は、神妙な顔のリンを見てやれやれ、と肩をすくめる。

「真面目だなあ、刈谷さんもこれでいいって・・・」

そう言いかけた千明にぐっと顔を近づけて、気合いの入った表情で返すリン。

「あのビバークが、ぐうの音も出ないようなイベントにしたい！」

野クル時代から、リンに至っては中学生の時から、その雑誌は自分たちのアウトドアの教科書とも言えた本だ。時にキャンプめしを吟味し、時にキャンプ候補地を参考に

し、

またある時は憧れの道具の値段に鼻血をだしたりしたものだ。

そんな有名誌の紙面を、自分たちで完璧に彩りたい。そんな夢のようなチャンスが今まさに

目の前に転がっているのだ。

「しようがねーな、もう一肌脱ぐか！」

そう言つてスマホを取り出し、“追加アイデア募集中”というメッセージを仲間たちと

ていぼう部の面々に送る千明。

「他力本願かよー」

呆れるリン、だがもう野クルの側でのアイデアは限界まで絞り出されており枯渇状態だ。

作業着レンジャーショーなんて無茶振りやドローンを駆使した空飛ぶテントなんてアイデアまで

出尽くしており、さすがにネタ切れ感は否めない。

ここはひとつ、ていぼう部さんのナイスアイデアに期待したいところだ・・・



「じゃあ、かんぱーいっ！」

「何の乾杯ですか、何の！」

熊元熊本県芦方町、カクテル居酒屋の一角にてビールの大ジョッキを掲げる小谷さやかに

鶴木陽渚がジト目で答える。さやかは構わずごっごっごっごっ！とジョッキを開けてまはーっ！と

大息をつくくと、いいのいいのといった表情で手をぱたぱたさせる。

「釣りは順調なんでしょ？ そのお祝いでいーじゃない！」

実は福岡勤務の陽渚も、あれ以来週末はマメに里帰りして、来たる遠征キャンプの食材確保のために、かつての仲間たちと竿を出していたのだ。

まあその度に週末はこうしてさやかに付き合わされる羽目になるのだが……彼女、母親ですよね？

「まーそうなんですけどね、ちょうど青物も入って来てますし、結構大物も確保できてますよ。」

芦方は内海ゆえに青物はなかなか入ってこないのが常だ。だが今年は5年ぶりにイワシが

大量発生して芦方に入り込んだために、それを追いかけて大型の青物が多く釣れる当たり年と

なっていた。

「ヒラマサ、カツオ、ハマチ、カンパチ、サワラからタチウオなんかも上がってます。ゆらさん情報だとキハダマグロまでいるそうですよ……さすがに釣れてませんけど。」と、そんな彼女たちのスマホにメッセージが届く。

「……大垣さんだ、企画通ったって。」

「おー、やったわね。これで陽渚ちゃんも雑誌に載るわねえ。」

酔った勢いで絡むさやかに、てへへと照れ笑いしてカクテルを持ち上げる陽渚。答えてさやかも

ピッチャーからビールをジョッキに注いで再度掲げる。

「企画の採用と成功に、かんばーいっ！」

陽渚は意外にもお酒に強かった。学生の頃から年齢以上に幼い印象がある彼女が、成人して

みれば実は酒豪だったという事実には皆が驚き、さやかは嬉々として呑み友に指名する。

もつともさやかがビールメインなのに対して陽渚は色とりどりのカクテルがメインだ、

裁縫が趣味の彼女にとってはカラフルなお酒を様々に味わうのが好みの飲み方だっ

たのだ。

「……ん？またメール。今度は“追加アイデア募集中”？」

千明から連続して送られてきたそのメッセージに、陽渚はうくと頭をひねる。

「いやあく大晦日が楽しみね。また美波ちゃんと飲めるなんて……ましてやあの富士山を

眺めながらねえ、生きててよかつた。」

やつすい命ですなえ、と呆れる陽渚に、さやかはわりとマジ目で反論する。

「想像してみなさいよ、あの富士山から昇る朝日にグラスを重ねて……そのままぐいっ！と。」

まるで朝日を飲み干してる気分になるわよきつと！

陽渚はその言葉にそんなわけないと反論しかけて、あ……と固まる。形を成さなかつた

その景色が、さやかの言葉とダイヤモンド富士と言う符号、そして今の自分たちの状況で

ピースががっちりハマった！

「それ！それですよ先生、いけますよその企画!!」

がっしりとさやかの肩を掴んで迫る陽渚。何事？と困惑するさやかに陽渚はかぶり

つくように

詰め寄って言葉を続ける。

「ほら、富士山って山頂がえぐれて御猪口おちよこみたいじゃないですか！で、そこから

昇る朝日をお酒に見立てて、それに合わせてお酒を掲げたらきつといい絵になりますよ!!」

テンション上がりっぱなしの陽渚にさやかは呆然とするばかりだ、そもそも彼女は大垣の

アイデア募集中のメッセージすら見ていないのでなおさらである。そんなさやかに構わず

スマホで千明にメッセージを送る！

『ダイヤモンド富士に色とりどりのドリンクをグラスに掲げて、それでフォトコンテストなんて』

『どうでしょうか!』



「おおー！これはいいんじゃないか・・・どうかな、志摩隊員?」

陽渚のメッセージを受け取った千明が、そのよさげな企画に雑誌のプロであるリンの返事を待つ。

リンはアゴに手を当て、うーんと唸って送られてきたアイデアを吟味する。

（あのキャンプ場の最大の売りはダイヤモンド富士。だがそれだけに写真は誰が取っても同じで

ワンパターンな気がしたが・・・グラスを朝日に掲げれば光の反射で様々な絵が撮れる。それを

フォトコンにすれば参加者も工夫を凝らし、それが雑誌に載るとなればますます・・・）
「・・・ヤバイぞこれ！」

言葉面とは真逆の、らんらんと輝く目をしたリンが大垣を見据える。まさかこの短時間

にここまで素晴らしいアイデアを送ってくれるとは！

あとは最後の課題、お酒限定でさえなくなれば・・・

「千明！お前昔にノンアルコールのカクテル作ってたよな!!今も出来るか？」

「あ、ああ。一時期凝ってて、まだ本やレシピノートもあるから・・・」

酒屋バイトの経験のある千明は、かつて先輩から教えてもらったノンアルコールカクテルを
キャンプで

披露した事が何度かあった。

その技術があればこの企画、子供や下戸の方でも参加が出来る！

「千明！高下たかおりキャンプ場プロジェクトリーダーとして、当日バーテンの担当を任命するっ！」

「よ、よしきたっ！任せるツラーっ!!」

やおら立ち上がって傍目もはばかりせず叫ぶ兩名。まあお酒のせいにしておくとしよう……。

第5話 いざ山梨!①大野真

“ダイヤモンド富士、初日の出に乾杯!フォトコンテスト開催”

その告知が雑誌“ビバーク”と“しゃちほこさんぽ”のWeb版で発表されてすぐ、会場である

松ぼっくりキャンプ場の大晦日予約は満杯締め切りとなった。

特に大手雑誌のビバークはそのアイデアを大きく取り上げ、来年の新刊で大増ページを取って

扱うことが決定していた。担当のライターや編集者はそれこそてんてこ舞いで、こんな事なら

いらんプレッシャーかけるんじゃないやなかった、と冗談交じりに苦笑いしたほどだ。

キャンプ場運営チームも年末年始に向けて万全の準備を進めていく。リン、なでしこ、千明、

あおい、恵那達も少しでも多くの人に快適に過ごしてもらおうべく、大晦日のキャンプは諦めて

管理棟での泊まり込みで対処する事になった。

あと、初日の出の時間に飲酒するなら、チエツクアウト時の運転に備えてアルコールチエツカーの準備も必要になる、恵那のこの提案は即採用されて多数のチエツカーと消毒液が

用意された。

そして師走は飛ぶように駆け抜けていく。

九州、白州、芦方。多くの企業が仕事納めとなる29日の朝、大野が一足早く山梨へ向けて出発する事になった。彼女はなでしこと共に元旦の炊き出し鍋を手伝うことになっており、

その仕込みや調理法の打ち合わせに出向くことになる。

かつて高校時代もそうだったが、なでしこと大野はお互いの仲間内でも体力ナンバーワンな

存在で、今回のイベントでもより精力的に動いていた。

「じゃあ、お先に出発します。みなさん山梨でお会いしましょう。」

先発が大野なら、最終発は冷凍車で魚ごと向かうしずくと相乗りの夏海だ、もろもろのキャンペーン

道具も一緒に運んでもらうので、大野も自分の荷物をしずく達に託していた。

「任せて下さい。」

「真ちゃんも気を付けて〜」

空港行きのバスに乗り込む大野に見送りの二人が手を振る。いよいよ10年前の約束、

その第一歩が大野によって踏み出される。

阿蘇熊元熊本空港に到着し、搭乗手続きを経た後にカフェに寄ってスマホでメッセージを送信する。まず最初の目的地は東京、昭島市のアウトドアモール。そこで勤務する懐かしき友人、

各務原なでしことこの再会を果たすことだ。

『今から飛びます、再会楽しみです。』

『お待ちしておりますっ！』



午後。アウトドア用品店に一人の長身の女性が紙袋を抱えて入って来る。

「いらっしやいませー。」

勤務中の3人の女性従業員が一斉に挨拶をする、何故か入り口付近に居並んで。

「なでしこちゃん、お久しぶりです。」

長身の女性がはにかみながらも、その列の真ん中にいる懐かしい顔に声をかける。うん、

10年前とちつとも変つてないわね、と心で懐かしんで。

「うん、真ちゃんも！変わらないねい。」

当のなでしこはしつかり言葉にしてそう返した。想いがシンクロしたことを感じた大野は

一同に満面の笑顔を返す。

「これ、みなさんにお土産です。召し上がって下さい。」

他にお客もない時間帯という事もあって、大野は事務所に通されて皆とお茶する事になった。

お土産の熊元銘菓^{熊本}“落ち武者返し”をつまみながら、大野となでしこの学生時代の話題に花を咲かせる。

「へえ、熊元^{熊本}まで釣りにねえ、羨ましい。」

「元旦に松ぼつくりでキャンプでしょ？ 私たちも行つたけどいいわよね、あそこ。」

店長や先輩に褒められて上機嫌のなでしこがうへへと頭をかく。何より10年ぶ

りの友人が

相変わらぬ美人さんで、その再会を喜んでくれたことは何よりうれしいものだ。

「海洋調査員? すごっ!」

大野と名刺交換をした店長は、その役職を見て目を丸くする。水産業の活性化に従事する

大野が日本中の海を飛び回っている事に、驚きとそして納得の目を向ける。なるほど、

たくましさを感じるわけだ。

「いいよねー海。 私たちなんかもう山ばっかりで・・・」

「でも山ならではの楽しさもありますし・・・そうだ、どこかワカサギ釣り出来る所を

ご存知ないですか?」

南国^{九州}臼州の大野にとって、凍った湖面に穴をあけて釣りをするワカサギ釣りは

憧れの的の一つだ。是非空き時間を使って経験したいと思っていたのだが・・・。

そんな大野の言葉に顔を見合わせる従業員一同。やがてうん!と頷き合った後、なでしこが顔を

キラキラさせて大野の手を取る。

「任せて! 富士五湖周辺なら出来る所あるから案内するよ!」

「3つ向こうの用品店なら仕掛けも売ってるわよ、寄って見たら？」

店長がそう勧める。このアウトドアモールは店舗によつて様々なジャンルのものが販売されている、山での釣りならその店舗が扱っているはずだ。

「ありがとうございます、是非寄ってみますね。」

「それではみなさん、よいお年をー。」

仕事納めとなつたなでしこが店長たちに頭を下げる。隣では両手に紙袋を下げた大野が

いろいろお世話になりました、と続いてお辞儀をする。

「うん、良いお年を。来年も頼むわね、各務原さん。」

「大野さんも、良い旅を。」

「はいっ！」

なでしこの運転する車が大野と荷物を載せて一路、山梨へと向かう。ホテルを取るつもりだった

大野をなでしこは強引に実家まで連行する事にしたのだ。途中のパーキングで遅めの昼食を取り、

夜の帳を迎える頃には、身延町の各務原家に辿り着いた。

「いらつしやい大野さん、ゆつくりしていつてね。」

「今夜はぼたん鍋を用意したよ、お口に合えばいいんですが……」

「どうやら大野がここに宿泊する事は予定済みだったらしく、なでしこの両親も当然のように」

歓迎体勢万全だった。ただ遅れて帰宅したなでしこの姉、さくらは大野を見てその大人な雰囲気に

なでしこに「本当に同い年？」と聞いて少しむくれられていたが。

夕食をご馳走になった後、二人は明日以降の予定の打ち合わせに入った。明日の午前

は

なでしこもいろいろ所用があるとの事で、大野はさくらの車で大垣千明山梨県観光推進機構の所に顔を出し、

午後からはなでしこも合流して、正月の振る舞い鍋の最終確認をする事になった。

「大垣さんとの再会も楽しみですよ……」

「あきちちゃん変わってないよー、相変わらずテンション高いしねえ。」

そんな二人を眺めながら、さくらはふつ、と息をついて顔を和ませる。高校時代からの

親友であるリンちゃんとも、幼馴染である綾乃とも違う形で、なでしこと隣り合う形が

ぴったりハマる大野のその存在に。

話し込む二人のちやぶ台の上に置かれたなでしこのスマホ、それに結ばれたフェルト製の

ストラップ、そこに描かれた二人の顔が今、目の前で親しげに話しをしている。

「いいコンビじゃない。」

「さあ、運命の松ぼっくりキャンプ場、ダイヤモンド富士初日の出まで、あと2日！

第6話 いざ山梨!②黒岩悠希

『んじゃ、うちも出発するばい。』

仲間内に、そして山梨勢のみんなにメッセージを送信する黒岩。大野から遅れて数時間、

バイクで山梨までの長旅がこれからスタートだ。

といっても真つすぐ目的地に向かうわけでは無い、道中様々な所に寄り道して仕事である

ライターとしてのネタを拾いながら向かうつもりではあった・・・のだが。

『今から出発なら〃芦方しらぬい〃に寄って貰えますか?』

多数の道中お気をつけて、待ってますよのメッセージに交じってそう伝えて来たのは志摩リンだ。

その場所はかつて彼女たちが来た際にお土産を買った道の駅だ。何か買ってきて欲しいもの

あつとか?などと思いつつ『あいよー、ついたらまた連絡するばい』と返しておいた。出発してほどなくバイクは道の駅〃芦方しらぬい〃に到着する。12月の風は白州^{九州}

といえど

冷たく、この先の長旅を想像してちよつと憂鬱になる。こういう時は・・・

「はあく、やつぱ足湯はあつたまる〜」

年末の道の駅はいつもよりやや混雑していたが、それでも足湯スペースには5人ほどの

お客しかおらず、思う存分冷えた足先をあつたためる事が出来そうだ。

「さうて、志摩さんにメッセージ送らんとね〜。」

スマホを取り出し、SNSチャットを開いて『到着したばい』文字を打ち込み送信する。

足湯の机にもたれかかりながら返信を待つ。と、すぐ隣でもメッセージの着信音、人の集う

場所ならまあよくあること・・・

「じゃ、出発しますか。」

「・・・ん？つて、うわあつ！し、志摩さん？」

普段のんびりな黒岩が飛び跳ねるように反応する。だがそれも無理なき事、なんと山梨、

いや今は名古屋か、にいるはずのリンがなんと黒岩の隣にいるのだから。

してやったり、の顔でピースサインを掲げながら解説を入れるリン。大晦日から3日目まで

取材出勤の彼女はその代休を昨日からとっており、ならばと迎えも兼ねて阿蘇ツーリングを

強行したとの事だ。

「あ、こちら私のツーリング仲間の土岐綾乃さん。」

「よろしく、黒岩さん。」

リンの向こうで足湯に浸かりつつテーブルに突っ伏している女性が、ややけだるそうに

手を挙げて挨拶する、彼女のそのしんどそうな表情を見るにかなりの強行軍であったことが

伺える。

「まったく、元氣過ぎるやろ。」

溜め息を拭いてそう返す黒岩。でもまあ彼女の真意は何となくわかる、お互いバイク乗りなら

一度は一緒に走ってみたいと思うのだろう・・・だからといって山梨から熊本まで来るなんて・・・

「山梨には伝説がある。火児島鹿兒島の桜を見にスーパーカブで走破した女子高生の伝説が。」
「そ……そりや、すごかばいね……」

山梨女子のDNAとバイクの意外な関係、なんて記事を思い描きながら引く黒岩。ひよつとして

彼女たちは山の娘、高所から駆け下りるならどこまでも下って行けるイメージでもあつとか？

どつちにしろ帰りは登らにやららんばいに。

「憧れの阿蘇パノラマライン走破！いいコースでした。」

「まーおかげで疲れて疲れて〜」

元気なリンとノビ気味の綾乃にやれやれ、と息をついて、この冒険好きで無茶な二人の為に

進行ルートを思い描く。二人とも大晦日までフリーな事を確認してからの提案。

「四国に渡って、四国カルストから土佐東街道を上がって、本四連絡橋渡っていくばい。」
「おお！と目を輝かせるリンの横で、綾乃がぼつたりと机に突っ伏し直す。ちよつとも

う

勘弁してと言いたげな綾乃に黒岩はふふん、という顔で返す。

「四国へは大炒大分からフェリーばい、ゆつくり休めつとよ？」

「賛成！はいはいさんせーいっ！」

がぼつ、と体を起こして挙手する綾乃に、思わず笑いをこぼすリンと黒岩。

国道57号線を走破し、佐賀関港からフェリーに乗り込むや否や、綾乃は「あとはまかせた……」

と毛布と枕を相棒にして座敷に寝っ転がる。その横で腰を下ろしてくつろぐリンと黒岩。

「面白いや志摩さんも雑誌のライターやつとんやね。」

「え？という事は黒岩さんも……」

リンは雑誌社所属だが黒岩はフリーのライターだ。様々な小出版社に顔を繋いで、ちよこちよこ

色んなジャンルの記事を請け負ったり、自分で書いたエッセイを持ち込んだりしている。

その話におおー、と感心したリンは、一呼吸おいて黒岩にずいといと詰め寄る。

「黒岩先輩！私の書いた記事、どう思いますか？」

元々出版社の営業として就職し、最近ライターの方に配置転換したリンだが、どうも自分の

企画はボツになる事が多く、先輩の刈谷達にページの埋め合わせをしてもらう事が多

かった。

ここはひとつ遠く白州九州の地で記事を書く先達に、何かアドバイスを頂きたいところだ。

「よく書けと思うけどね、ちゃんと読み手の知ってそうな事も盛り込んでるし。」
雑誌「しゃちほこさんぽ」の記事を読みながらそう答える黒岩に、リンはえっ!?!という

表情をして固まる。「知らない事」じゃなくて「知ってそうな事」って？

「志摩さん、記事を読んでもらうっていうのは、読者の知る事を書くのが一番たい。」

本を読む、という事はその本が扱うジャンルに読者が少なからず精通しているという事だ。

例えばアウトドア雑誌を読む人はアウトドアを嗜んでいるか、あるいは憧れており、そこに

書かれている記事の内容をあらかじめ把握している事が多い。ならその本は読者に
とって

一見無意味そうに思えるだろうが、実はそれがいいのだ。

「本で活字になつとる事は、いわば真実なんよ。説得力が違うやろ? それを読む読者も
自分とプロのライターの意見が一致してるとシンパシー感じるもんや。」

「・・・わかります。」

リンも自分が一読者だった頃の事を思い出す。そう、自分が知ってるちよつとマニアな

知識が雑誌に載ってたりすると妙に嬉しかったものだが、そういう事だったのか。

「草刈りやノコギリの扱い方、重機の注意点を細かく書いてるのも高ポイントばい、

キャンプする人は肉体労働者も多かけんね、あの記事見て「あるある」って思った読者も

多かじゃなかと？」

黒岩のその絶賛に、リンは逆にうっ！という顔をする。

「いや・・・あのへんは先輩や編集長に、書いておけて言われて書き足したんです。」

ちよつと落ち込むリンに、あちゃーという顔をする黒岩。うまく読み手のツボを押さえた

記事だと思ってたが、なるほどベテランの手が入っていたか。

「黒岩さんの記事、見せて貰えますか？」

そう切り出すリンに、黒岩はちよつと青い顔をして引く。いや、あたしの記事なんてプロのライターに見せるほどのもんじゃ・・・と拒みかけるが。

「あたしも見たいなー、黒岩さんの記事。」

いつに間にか起きてた綾乃もそう続く。黒岩ははあ、とため息をついて、しよんなかねと

フェリー売店前の新聞、雑誌コーナーにあるローカル誌を手に取り、会計を済ませて戻って来る。

「あはははは！バイクの記事がいつの間にか野鳥の話になってるし。」

大笑いする綾乃の横で、リンは至極真面目な顔で黒岩の記事に目を走らせる。彼女の書いた

それは専門的な掘り下げは一切なく、全く無関係な所から共通の話題を拾い上げて記事にする

という手法を取っている。このバイク記事もオートバイと野鳥の意外な共通点を上げ、それを

うまくエッセイとしてまとめ上げていた。

「・・・すごいなコレ。」

心からそう称賛するリン。彼女が記事を書いて編集長に採用を言い渡された時、決まって

「いいね、無難に書けているよ」との言葉を頂いていたものだ。最初はそれを

お褒めの言葉と受け取っていたが、回数を重ねるたびに逆の意味に聞こえていたのだ。

もしこんな個性的な記事を自社の編集長に提出したら何て言われるだろうか……。どうやったらこんな記事が書けますか?と詰め寄るリンに、黒岩は目を反らして頬を掻きながら、答えにくそうに語り出す。

「ウチはただ……。自分のいろんな経験を当て込んでいるだけだ。その記事を書いた時
も

高校時代に鶴木の奴が助けたアオサギを思い出してこじつけただけだ。」

「自分の経験を……。当てはめる。」

「まあ同じ人生なんて誰もないからねえ。」

黒岩の言葉に、綾乃の感想に、リンは自分の視界が開ける思いがした。そう、自分はその記事を書いた時、

書く時、その記事のジャンルだけしか見ていなかったか?視野が狭くなり、どこか他の記事の

真似をしてなかったか……。自分が人生で経験した色んな事、見た景色、感じた空気、そして

耳を通り抜けた音、聞こえて来た気がした“声”。

／＼コンニチワ／

ああ、そうだ。しゃべるはずのない松ぼっくりが、薪が、道路に置かれた警官人形が、自分に挨拶をしているのをずいぶん妄想して来たじゃないか。あれは子供っぽい恥ずかしい妄想、

ではなくて、多くの読者をクスリと笑わせる、格好の記事の題材になるんじゃないのか！

もつと自分の中身を出せば良かったんだ、この黒岩さんのように。

「ありがとうございます！何かが見えた気がしました!!」

「お、おう・・・そりやよかったばい。」

ぐつ！と手を握ってくるリンに、黒岩は（これ、やばかねー）という表情でそう返す。良くも悪くも都会向けの優等生的な記事が書けてる志摩さんに、評価をダダ下げかかない

アドバイスをしちゃったんじゃないかなろうか、と。

—間もなく当フェリーは伊予三崎港に入港します、お客様は下船の用意を—

船内アナウンスが四国への到着を告げる。綾乃はやれやれあんまし休めなかったな、と

嘆いた後に、二人に向き直ってこう告げる。

「んじゃ、四国でもしっかり経験値上げないと、ね。」

「うむー！」

「そ、そうやね・・・」

フェリーの車庫扉が大きく開く。その先の景色はリンにとって、さらに自分を成長させてくれる

場所にきつとなる、バイクにまたがりエンジンをかける、係員が誘導を始める。

「さあ、待つてる四国カルスト、土佐東街道、みかんにかつおのたたきに徳島ラーメンに

さぬきうどん、そして本四連絡橋！」

さあ、いざ四国！

第7話 いざ山梨！③ 鶴木陽渚

「んふふ、楽しみだなあ。」

12月30日、早朝の新幹線の車内にて、思わず顔をユルめる鶴木陽渚。いよいよ山梨への

遠距離キャンプが、そして懐かしい野クルの仲間達へ会いに行く旅が始まったのだ。出発時間をSNSで伝えたところ、ちょうど斉藤恵那が時間を合わせて静岡駅で合流しようとする。

返事をくれたのだ。ほどなく犬山あおいも「じゃあウチも同伴で」との返信を寄こしてきた。

恵那は横浜のペットショップで働いているが、昨日が仕事納めで山梨に帰って来ており

わざわざ車で迎えに来てくれるそうで、その際にあおいも同乗してくるとの事。

静岡から山梨だって近いわけじゃないのにわざわざ迎えに来てくれるなんて、なんか申し訳

ない気がしたのだが、土地勘のない陽渚にとっては渡りに船であり、ここは有り難く

ご厚意に

甘える事にしていた。

新幹線の旅は、ある意味他では味わえないものがある。高速走行するモーターと風切り音が

気にならなくなったところから、その飛ぶように流れる景色は、その土地を早回しで巡っている

ような錯覚を感じさせる、思わず感慨深く呟く陽渚。

「野クルのみんなも10年前、この光景を見て来たのかなあ。」

昼前の静岡駅の雑踏の中、下車した陽渚はさつそく指定があつた駐車場に向かう。

果たしてそこには大きなアクシヨンで手を振る、懐かしい二人の人物が待っていた。

「おーい! 鶴木さん、こつちだよー!」

「お疲れさんやなあー!」

ああ、覚えてる覚えてる。あの黒岩部長の髪型をイジって、酔ったさやか先生の絡みを

さらつと躲したデキる人齊藤さん。それに抜群のプロポーションに何故か関西弁が
へんな

ワンポイントの印象を与える、夏海と凄く仲が良かった犬山さん！

嬉しそうに小走りで駆けよって、ぱあつ、と笑顔になる陽渚。ようやく、ようやく10年前の

約束が果たせた、再会が叶ったのだ。

「あはは、変わらないねえ鶴木さん。」

「斉藤さんもお元気そうですね。犬山さんも変わらなく・・・て？」

そこまで言って『・・・え？』という表情で固まる陽渚。彼女の目の前にいるのは確かに

犬山さん・・・の、ハズ。だが、彼女は10年前に比べて、明らかに違う、いや違いすぎる

所がある!?

「あ・・・あの、犬山さん・・・ですよ、ね？」

「そうやでー、久しぶりやなあ鶴木さん。」

しれつと返す犬山さんだが、陽渚はその変わりように（ええー？）という表情を隠せなかった。

胸が！そう、あの豊満だった、大野さんにも負けない立派な、あやかりたいとすら思っただ見事な

バストが、まるで見る影もなくぺったんこになってるじゃない!なんで・・・?
「ああ、これはね〜。」

「聞くも涙、語るも涙な話なんや・・・聞いてくれるか鶴木さん!」

呑気な声の恵那に続いて、無くなった胸を押さえながら呪詛のように呟き、ゆらあつと

陽渚に顔を向けるあおい。

「は、はいっ!」

体をびーん!と硬直させ、冷や汗を流して固まる陽渚。

「山梨がフルーツ王国なのは知つとるやろ?その山梨にはこんな伝説があるんや・・・。」

ある日女性が外を歩いていると、突如として目の前に果樹園が現れることがある。

いつもは何もない所なのに、その時に限っているんな果物の木が入り乱れて群生して得も言われぬ香りを漂わせながら・・・

「その香りにつられて果樹園に足を踏み入れたら最後!いきなり四方八方からツルやら枝やらが女性の体に巻き付いて・・・」

「・・・そ、それで?」

迫真の表情で語るあおいに、陽渚はごくりと生唾を飲み込んで身震いする。

「その果樹園に〃たわわエキス〃を残らず吸い取られてしまふんやぁーっ!!!」

片手を掲げて絶叫するあおい。その迫力と恐ろしい気な結末に思わず悲鳴を上げてドン引く陽渚。

「ひいっ、た、たわわエキス!?!」

「せや。そして、後に残ったんは・・・」

「残った、のは?」

「たわわに実った果物の実の数々と、えぐれんばかりに失われたその女性の

おっぱいなんやぁーっ!!!」

無い胸を張って話をめるあおい。そう、ウチの胸もまたそのたわわエキスを残らず吸い取られて、この有様なんや、と。

「ひいひいひいっ!!」

両手を頬に当てて、まるでムンクのように叫ぶ陽渚。そんな恐ろしい果樹園がこの山梨県には存在するの? 山梨コワイ山梨コワイ山梨コワイ・・・

—ピロリン!—

「ひ、ひいっ!・・・って、着信?」

未だにビビりながらもスマホを取り出し、恐る恐るその画面を見る。そこには・・・

『うそやでー!』

「だまされたー、妹さんだったのかー!」

恵那の車の助手席で、目をバツテンにして、してやられたー、と天井を仰ぐ陽渚。

あのメッセージを見た後目の前の二人に向き直つてみると、目を泳がせまくつてピースする

犬山さんと、スマホに“ドッキリ大成功”の大文字を掲げてくすくす笑う斉藤さんの姿があった。

「どうやらこの仕掛け、ていぼう勢が山梨に来ると聞いた時から練っていた計画だそう
だ。」

なんでも犬山家はこういったジョークを仕掛けるのが大好きらしく、まんまとター
ゲットに

されてしまったようだ。

「ごめんねー、お昼まだでしょ鶴木さん。ドッキリ賞としてウナギ奢るから勘弁して
ね。」

「ホンマやでー、鶴木さんには親近感わくから心が痛んだわー。」

恵那に続いてあおいの妹、犬山あかりが後部座席から屈託のない笑顔でそう返す。妹だけあって

少々のコーデイネイトで姉に化けるのは簡単だったが、ゆいいつ一致しない胸のサイズを

逆手にとつてのサプライズだったらしい。ちなみに姉のあおいは今日夕方からの現地合流との事だ

「たわわエキスはホンマにあるんやで！ウチなんかそのエキスをあおいちゃんに

全部吸われてもうてこの有様なんやから・・・仲良くしよなあ鶴木さん。」

どうもあかりにとつて胸の無さはコンプレックスらしく、同じくぺったんこの陽渚にシンパシーを感じているらしい。

「ま、まだ私も可能性、あるもん。」

25歳になる陽渚の無駄な抵抗に車内に笑いが沸き起こる。ちなみに立ち寄ったウナギ屋でひと口かば焼きを頬張った瞬間から、そんなことどーでもいいくらい幸せな気分になったし、富士山が視界に入った時からすっかり心奪われて忘却の彼方へ飛んで行ってしまったのだが。

「着いたよー、ここが決戦の地、富士川松ぼっくりキャンプ場だよ。」

「あの看板、ウチがデザインしたんやでー!」

細い山道を駆け上がった先のキャンプ場に車が到着する。あかりの言葉に反応して車窓からアクリルガラスで出来た看板を見やって、おおー!と感心する陽渚。

「あかりちゃんは美大生だからねー。」

「へえ、どうりで。構図といいフォントのチョイスといい、外枠のスペースの開け方といい完璧じゃない!」

うんうんと感心する陽渚に、あかりはやけに詳しいなあ、と首をひねる。

「あ、私一応インテリアコーデイネイターやってるから。」

「プロやないか!」

場内には数組のキャンパーが今夜の泊りの準備をしていた。その上の管理事務所に
は

見知った顔の女性が3人、ズンドウを囲んで喧々囂々していたが、こちらに気付くと一斉に手を振り、笑顔で駆けつけてくる。

「鶴木嬢! ひっさしぶりだなあ。」

「ひなちゃんも変わってないねい。」

大垣千明と各務原なでしこが陽渚の手を取って再会を喜ぶ。特に千明は10年前に陽渚に釣りのペアを組んで指導をしてもらった事もあり、獲った手をぶんぶん上下させて

嬉々としている。その後ろでは一足先に合流した大野が、ひなちゃんお疲れ様、と長旅を労う。

恵那も大野との再会に笑顔を見せるが、その横であかりが大野の胸をじつと見ながら思わず嘆く。あおいちゃんに匹敵するたわわエキスの持ち主やな、と。

「じゃ、これ付けてくれたまえ。」

千明からスタッフの首紐名札を渡される陽渚。今夜はここで泊るわけじゃなく、あくまで

顔見せと簡単な手伝いをするだけの為に来たのだ。キャンプをしない者がキャンプ場を

うろつくのはマナー違反であり、それを避けるためにもゲストスタッフとしての立場で

動いてもらう為の配慮である。

明日に備えての準備、大野となでしこは振る舞い鍋の調理の最終確認を、千明は例のフォトコンテストに使う様々な貸し出しグラスと、リクエストに応じて出すカクテル

の

材料の仕込みに入っている。

「へえ、大垣さんカクテル作れるんだ、すごい!」

「学生時代にハマってたんだよ、今は飲む方がメインなんだがな。」

頭をかいて笑う千明に、陽渚は楽しみにしてますね、と手を合わせる。そっか、大垣さんも

イケるクチなんだ・・・

一通りキャンプ場を見て回った陽渚がみんなの所に戻って感想を告げる。

いいキャンプ場です、ここを自分たちで作るなんて本当にすごい!と絶賛した後、

手空きの自分が出る事をと考えたアイデアを伝える。

「せっかくのお正月なんですから、もう少し飾りつけを凝りましよう!」

確かに正月用に門松こそ用意されているが、他は特にお正月使用の飾りつけもなく、普通の殺風景なキャンプ場ではない。それがいいんだよという人もるだろうけど、陽渚にしてみればやはりどこか物足りなさを感じる。

「そや、そのとーり!さすがプロや。ちゅーわけでウチらはこのキャンプ場をもつとデコるで!」

あかりの言葉に陽渚も、おーっ!とグーを掲げ、裏の倉庫周辺に何か使えそうなもの

が無いか

物色を始める。

「この倒木かつこいい、入場門の際に飾ったら良さそう！」

「これホコリまみれやけどモールや！洗ったら使えるやないか。」

「日の丸の旗発見！ポールもあるし、管理棟に飾ろう。富士山に映えるよ!!」

美術大学生とインテリアコーデイネーターの指示の元、大晦日く元旦用の飾り付けが急ピッチで進んでいく。恵那も買い出しに車を出し、夜のとぼりが落ちる頃には

一段階クオリティの上があった（？）キャンプ場へと姿を変えたのだった。

最後に駆け付けた犬山あおいが思わず「何があったんやコレ・・・」と固まるほどに。

第8話 約束の日の出

「遅くなっちゃったな・・・千明たちもう始めてるかな？」

バイクを駐車場に止めて管理棟からキャンプ場に向かうリン。今日は四国の室戸岬から

本四海峡を渡ってここまでの強行軍、松ぼっくりキャンプ場に着いたのはもう夜9時を

過ぎていた。

「おーいリン、こつちこつちー。」

段々になってきているキャンプ場の一番上で、お馴染みの面々がテーブルと焚火を囲んでお茶をしている・・・約一名はアルコールだが。

「千明呑み過ぎ、顔真つ赤じゃないか。」

「いやあ、まだグラス半分ヅラ〜。」

ラム酒の入ったグラスを掲げてご満悦の千明がそう返す。とはいえ後ろのビニール袋に

大量のビールの空き缶が入っているのはごまかせないが。

「なでしこは？」

「ああ、惜しかったよ、ほんの1時間前に大野さんと鶴木さん、それにあかりちゃんを下
の

ホテルまで送っていったとこ。」

「入れ違いになってしまってたなあ。」

恵那とあおいのその返しにあー、と残念そうな顔を見せるリン。自分だけはどうやら
あの

懐かしい面々との再会は明日にお預けになったという事か。ま、黒岩さんとは先に
会ってるから

お互いさまではあるが。

「でも凄いやねーなでしこちゃん。」

「大学在学中に立ち上げたキャンプギアメーカーが急成長。今やアメリカに本社を持つ
CEOやもん。」

「変わったちまつたよなあ。」

・・・え？

「いやお前ら何を言ってるんだ？」

いつからなでしこは大企業のトップになったんだ？っていうかあいつは今も東京の

アウトドア

シヨップの従業員でしか無い筈だし・・・？

3人を見回してみる。全員そろってなんかニヤニヤしてるんだが・・・絶対何か企んでる顔だな。

「あ、来たみたいだよ。」

空を見上げる恵那に習って天を仰ぐと、そこにあつたのは何と空飛ぶテント！四隅からロケットの

ような噴射をして飛びながらゆっくりと近づいてくる。

「え、うえええええっ!？」

そしてそのテントの中から顔を出し、手を掲げているなでしこの姿！なんだこの展開は？

「みんなー、お待ちせーっ!」

なでしこの声が控えめに響く。一応、他の場所にも他の泊り客がいるので、それに気を使っているのか。

「ぱーん、ぱあくん、ぱあくん、ぱぱぱーんっ!!」

恵那達が壮麗なファンファーレを口で奏で、まさかのなでしこの登場に華を添える。

「……って、ドローンじゃん！」

彼女らの元まで降りてきたテントは、縦横20センチほどのミニチュアのそれをドローンで

吊り下げているだけのものだった、中にいるなでしこのイラストがなかなかリアルに描けている。

と、後ろの草むらからコントローラーを手にしたなでしが、うへへ〜という顔で現れた。

「リンちゃん長旅お疲れ様〜。」

なんでもこのドローン、千明の所属する山梨県観光推進機構からキャンプ場PRの一
案として

出されたそう。キャンプ場をこれで空撮して、眼下の景色や遠くの富士山を楽しんでもらおうと

発案されたのだが、結局その企画はボツになった。「ドローンを飛ばせるキャンプ場」
な

イメージが定着してしまうとそのテの人が殺到して、本来ののんびりキャンプを楽し
みたい人との

トラブルが問題になるからだ。

で、リンが来るまでのわずかな時間でこのサプライズを仕込んだとの事。

「これな、ちょうど10年前になでしこが妄想してたヤツなんだよ。」

空飛ぶテントのミニチュアを抱えてころころ笑う千明。あれは確かふもとつばらだったか、

リンが原付でガス缶の買い出しに出た時になでしこが「10年後の自分たち」を妄想して

そんな話を語っていたのだが、さすがにまだ空飛ぶテントは実現していなかった。

「てか大企業のCEOって盛り過ぎだろ。」

「へへへ、でも10年後にはなってるかも。」

「ねーよ!」

ジト目でそう告げるリンにもなでしこはメゲずに笑顔で答える。いや、あるいは本当に

そうなってるかも知れないな、なでしこのバイタリティを考えたら・・・。

「黒岩さんは?あと土岐さんもいっしょだったんでしょ。」

「そうそう、アヤちゃんと黒岩さんとのツーリングどうだった?」

ココアをすすりながらリンのツーリング談議に花が咲く。あれから四国カルストを超えて

深夜の月夜の海岸線を走破して高知県、室戸岬で一泊。翌朝に海の朝日に照らされた土佐東街道を北上して徳島入り、そして本州に戻ったのだが・・・

「本四連絡橋を全部渡ったあつ!？」

思わず絶叫する千明。四国と本州を結ぶ連絡橋ルートは全部で3つあるが、なんとリン達は

くじ引きをして3人に分かれて3つの橋を別々に渡つて来たとの事だった。

「徳島からやったら・・・しまなみ街道担当は悲惨やねえ、だれが担当したん?」

あおいがぐるぐるマップを見ながら思わずこぼす。淡路島経由の鳴門神戸線が最短ルートで

香川まで回る瀬戸大橋ルートならまだマシなレベルだが・・・愛媛まで引き返してしまなみ街道なら

ほぼ四国を一周した事になる・・・

「私。」

キラキラした目で自分を指差してそう告げるリン。せつかく四国まで来たのだから出来るだけ

制覇したいと思っていた彼女にとって、このクジの結果は願ったり叶ったりだった。

岡山で綾乃と、大阪で黒岩と合流した後は、さすがに観光の余裕はなく真つすぐにこ

の

山梨までやって来たのだが……さすがに綾乃と黒岩は近くのホテルに入ってすぐバタンキュー

した模様だ。

「タフやなあ……」

「明日は取材でしょ、大丈夫なの？」

明日にはビバークのスタッフを迎えての合同取材が待っている、その前に敢行した長距離

トラベルが疲れを溜めないかとさすがに心配になる。が、そんな彼女らにもリンはぐっ！と

手を握って「大丈夫！」と元気に返す。

そう、黒岩に教わった事、より個人的な記事を書く為にはなにより経験が大事なのだ。四国を一周して様々な景色を見て来たリンにとって、明日以降の仕事のネタはがっつり

確保できている。

「ま、明日はダイヤモンド富士、本年终いの日の出見るからな、早めに寝ておこうぜ。」

「さんせい。」

千明の音頭で一同就寝の準備をする。明日は大晦日、今年最後のダイヤモンド富士となる。

元旦の初日の出にスタッフの仕事が入っている一同は、のんびりと日の出を眺める余裕が

無いかもしれない。ならば一日フライングして、みんなでダイヤモンド富士を堪能しよう

こうして前日キャンプを取っていたのだ。

それはこのキャンプ場オープンの日にみんなで交わした、大事な約束。



「うわあー綺麗だねい。」

「すごい・・・ホントに富士山が輝いてる。」

「明日はこれをバックにフォトコンか、燃えるなあ！」

翌早朝、キャンプ場の一番の高台に並んでダイヤモンド富士を堪能する5人。さすがに

この寒い中、大晦日の日の出をわざわざ早起きしている人は彼女ら以外誰もおらず、広い空間で存分に堪能する事が出来た。

さあ、いよいよ一年の総決算！大晦日からの年越しキャンプの運営とイベントの日。懐かしき友人たちと、多くのアウトドアを愛するお客さん達と同じ時間を楽しく過ごすための

まさに決戦の日を迎えた。

「リンとなでしこはテントの撤収、あたしと恵那は周囲の見回り、犬子は管理棟を開けて掃除と準備を頼む！

「アイアイサー！」

入り、
各々が今日の激務に向けて動き出す。あおいは管理棟のカギを開けて運営の準備に

い
そのついでにラジオのスイッチを入れる。あまり大音量でなければラジオ放送はい

BGMになり、ちよつとしたニュースや天気の情報も知る事が出来る。

し
——本日の甲信越地方は、日本海から南下する前線の影響で曇り、山沿いは雪になるで

—この前線、明日まで停滞が予想されており、残念ながらこの地域での初日の出は—

「これ、あかんヤツや・・・」

第9話 いざ山梨!④帆高夏海、湯浦しずく、そして・・・

「お魚オツケー、キャンプ用品オツケー、他もろもろオツケーっ!」

「ついでに、さやかちゃんのビールサーバーと樽生19LもOK,と。」

「どんだけ? む気なんですかね、さすがはビールバカ・・・。」

12月31日午前0:30、芦方漁業組合の冷凍倉庫前にて湯浦しずくと共に保冷車の荷物の

最終チェックをする夏海は、最後に積み込まれている店舗用の生ビールサーバー一式を見やっつて

呆れ汗を流す。

「さやかちゃんは今日の朝に飛行機だっけ?」

「ええ。さすがに飛行機にコレは積めないからって・・・。まったく現地調達すりゃいいのに。」

顔を見合わせて苦笑いする夏海としずく。お互いさやかちゃんとは長い付き合いなので

彼女が旅行といえればビールを飲む旅になるのは最初っから承知の上だ、せめてキャン

プ場では

醜態をさらさないで欲しいものである。

「つと、噂をすればなんとやらね、さやかちゃんからみたい。」

しずくがスマホを取り出してメールボックスを開く。そこには懇願するアイコンと共に

さやかからのメッセージの一文。

『ゴメン、やっぱあたしも乗っけてっー。』

メールで詳しく事情を聞くに、どうも今日の甲信越地方は天候が荒れそうで、最悪飛行機が

欠航する可能性もありそうなので、やっぱりこっちの車で同行したいとの事だ。

この保冷車は荷台の前に2列の座席があり、運転手も含めて6名が乗り込めるトラックなので

さやかを乗せてもまだ余裕はある、結局燃料と高速代の一部を折半することで話はいった。

午前1:00、待ち合わせの道の駅、芦方しらぬいに到着したトラックを手を振って迎える人影がある、さやかちゃんと、そして・・・あつ！

その車の隣にトラックをつけて停車すると同時に助手席からしゅたつ！と飛び降り

る夏海。

その車の中に見知った顔があつたからだ、呼吸を合わせるように乗用車のドアも開き、

ひとりの少年が降りてくる!

「ケン坊! ひっさしぶり、元氣だった?」

「つりししよー、ひさしぶりたい!」

にかつと笑つて夏海と手を合わせたのは、さやかちゃんの一人息子、小谷健吾(7歳)だ。

さやかが結婚して海野高校の教師を引退してから、後任となつた夏海はさやかに色々な

アドバイスを受けて来た縁もあつて小谷家とは付き合いが深かつた。健吾が生まれて以来

よく面倒を見ており、海に山にと遊びに連れて行ったものだ。

特に釣りは夏海の得意分野という事もあり、たびたび竿を出しに行つてはその釣果で尊敬を得ていたのだ。

「こんばんわー涉さん。」

「こんばんわ、さやかたちをよろしく頼みます。」

しずくは乗用車の運転席にいるさやかかの夫、小谷渉（旧姓、黒川渉）に挨拶している。農家の3男坊である彼が婿養子として夫婦となったのが8年前、以来仲睦まじく小谷家の

米農家を切り盛りしている。

「・・・え？ふたり、つて？」

「おいも行きたい、やまなしにーっ！」

ぐるんと振り向いてしずくに叫ぶ健吾。予想外のサプライズにしずくも夏海もおおーと

顔をほころばせて、おっし行こう行こうとハイタッチを交わす。

「渉さんは行かないんですか？」

「ボクは正月は実家に顔を出さなくちゃいけないくてね・・・悪いけど二人をお願いするよ。」

「ちよつとー、私がお荷物みたいな言い方止めてよね。」

腕組みして夫に抗議するさやかだが、その瞬間に周囲の全員がジト目を返す。

「じゃあビール禁止で！」

「健吾まで・・・ひどーい！」

「あ、そうそう。ばーちゃん、やまなしいくならコメもつけてっ！」

健吾が指さしたトランクの中には30kg入りの米袋が鎮座していた。夏海はあーなるほど、と

言う表情で米袋を担ぎ、しずくに保冷車のゲートを開けて貰って中に押し込む。

「じゃあ、やまなしにむけて、しゅっぱーっ!」

「おー!」

3人が健吾の音頭の元、拳を天に掲げる。さあ、いざ山梨!

「でもさあ、どうして米なの?」

運転しながらしずくが不思議そうに問う。確かに米農家の小谷家で作られた米は熊本でも

ブランド米としての品質を誇っている、とはいえ向こうにも美味しい米はあるだろうに

どうしてこんな重たくてかさばる物を・・・?

「山梨県っていろいろあって、あんま米作は盛んじゃないんですよ。」

夏海が神妙にそう返す。保健体育の教師である夏海やさやかに知識としてその県の

歴史を知っていた。

地方病、片山病、またはマンブクリンなどと呼ばれる、当時原因不明だった奇病。

腹に水が溜まり、まるで妊婦のようにお腹を大きく膨らませて死に至る病。その正体は

皮膚から感染する寄生虫と、その幼虫を成長させる中間宿主である巻き貝によつて引き起こされるものだった。

山梨や広島、佐賀などで蔓延したその病を根絶するために、中間宿主であるその貝の撲滅運動が長年、それこそ100年以上にわたつて行われてきたのだ。

「山梨は水田を止めて果樹園を推奨したのよ、桃や葡萄なんかの栽培が盛んなのはそのせいなの。」

さやかが後部座席から解説を入れる、彼女の母、健吾のばあちゃんは佐賀出身で、その病の

怖さと、それと戦つた山梨県民の苦勞をよく知つていた。

「なるほど、だから米なのか。」

「10年前にキャンプに来た時に彼女たちも言つてたんですよ、『飯盒でご飯炊いてる』『ウチらは大体パックご飯やしなあ』つて。だからお米をさし入れるのはいいアイデアだと

思いますよ。」

「ウチのコメはうまいけん、やまなしのみなもよろこぶつとよー!」

病気の話は理解してない健吾だが、自分ちの自慢のご飯を食べてもらう期待に目を輝かせて

力強く断言する。その言葉に思わず顔がほころぶ女性陣。

PAでトイレ休憩の際、夏海は一同を集合させて写真を撮り、先行している大野と陽渚、

そして野クルのみんなに画像付きのメッセージを送る。

『元気なゲスト追加だぜ!』

真ん中でガッツポーズする健吾を囲んだぞの画像に、送り先の面々が様々に返信を寄こす。

『野生児カルテット襲来だね!』

陽渚はそう返してきた。彼女は健吾と少し面識があり、野生児の夏海とつるむ健吾に

“夏海二世”のイメージを持っていた、加えてしずくは漁師、さやかは猟師だ。

元々インドア派の陽渚にとってこの4人は典型的なアウトドアライフ人だった。

『健吾くん、さやかさんの監視お願いしますね。』

「まかしとキー!」

大野の返信に健吾はそうガッツポーズし、さやかは「大野さんまで・・・」とさめざ

めと

涙を流す。夏海としくは勿論大笑いだ。

『ちやんと寝かしとくばい、明日が辛かとよ。』

「お！久々に部長らしいじゃんユウ姉。」

黒岩の返信に夏海が感心する。確かに現在午前2時、事前に寝だめしていた夏海達はともかく

小学一年生の健吾は起きていていい時間ではない。が、言うまでもなく彼はすでに
 さやかに母

もたれて寝息を立てていた。

さすがに野クルの面々からの返信は無かった。時間が時間だし夜が明けたら彼女らは

大仕事が待っているのだ。今は貴重な睡眠時間のハズ、返信は夜が明けてからになる
 だろう。

が、山梨側でただ一人、そのメッセージに目を輝かせる人物がいた。

「これはやっぱり、冬美も連れて行かなくっちゃ、ね。」

大町美波。旧姓、鳥羽美波はそう言って、ベッドの横に眠る愛娘の頭をそつと撫でた。

「およよ？メール来てる。」

「あ、私も。帆高さんからか・・・」

テントの撤収を済ませたなでしことリンは、深夜に届いていたメッセージを開いて思わず

うわゝ、とニヤケ顔になる。

『元気なゲスト追加だぜ！』

未だ山梨に到着していない懐かしい友人、帆高夏海と小谷さやかとあと一人に囲まれて

真つ黒に日焼けした顔でガッツポーズを取っているちっちゃな男の子に視線が釘付

けだ。
「小谷先生の息子さんだって！可愛い、っていうか凛々しいねい。」

「うむ。子犬みたいな元気を感ぜるぜ・・・」

「おおー！小谷先生の息子さんか・・・なかなかワンパクそうじゃねえか！」

「ホントだねー、これは会うのが楽しみだよ。」

周囲の見回りを終えた千明と恵那も合流し、思わず可愛いゲストを迎える事を知って
テンションがますます上がっていく、これは張り切らなきや・・・

と、そんな一同に管理棟にいたあおいが走って来る。千明の「おーい犬子、メール見

たか？」

のセリフを、いつになく激しい剣幕で黙らせる。

「それどころやあらへん！みんな大変や、天気をチェックして!!」

え？と固まる一同。確か昨日の昼の予報では正月三が日までは晴れの予報だったハズ……

4人が一斉にスマホをタップして天気を確認しようとしたその時、彼女らの視界に白い氷の結晶がひとつ、ふたつ舞い落ちる。

天気予報のページが開く時には、キャンプ場から見える景色の全てが降り注ぐ白玉で彩られていた。

「なんてこった！よりによって今日から雪かよ!!」

「どうしよう、これじゃせつかくのダイヤモンド富士、初日の出が……」

まさかの天気の裏切りに愕然とする一同。特にリンはせつかくのフォトコンイベント企画が

おじちゃんになる最悪のケースを予感して、顔面真っ青でうずくまっている。

「これは……ヤバいで、色々と。」

あおいの言葉は的を得ていた。午前中から今日のキャンプ場予約のキャンセルを告げる

電話が相次いだのだ。特に雪慣れしていない地方からの遠征組は、山裾のキャンプ場で

雪に降られて帰れなくなることや、道中での車の立ち往生を恐れるのは無理も無いだろう。

「とにかく、役場に連絡して凍結防止剤を回してもらおう！」

恵那の提案に頷いて千明が電話をかける。もしここに来るための山道が凍結したら、最悪スリップ事故が発生しかねない、この松ぼっくりキャンプ場に来てくれるお客様に

そんな悲劇を経験させるなんて絶対にごめんだ。

午前9時、なんとか凍結防止剤の散布車がこつちに回ってきてくれた。道路一面に巻かれた

錠剤つぶつぶは車を通るわだちに転がり落ち、凍結を防いでくれるだろう。

だが、雪は止まない。
既にキャンプサイトには3センチほどの雪が積もっており、雪慣れしていないキャンパーは

設営にさえ一苦労だろう。しかもこれからますます雪は深くなる、最悪の場合今日は閉鎖の判断をしなければならなくなるかも・・・

「おー、降ってますねえ。」

到着したタクシーから降りつつそう呟く人物を、リンが神妙な顔で出迎える。

「……」苦労様です。」

降りてきたのはアウトドア雑誌、ビバークの人気ライター&カメラマンの木村氏だ。歳はリン達よりひとつ下だが、アウトドア関連のテレビや雑誌に顔を出す売れっ子のレポーター。小太りで温和な顔に似合わず非常に行動派で、山に海にと積極的なその活動と、実に美味そうなキャンプ飯を本當にうまそうに食べる愛嬌のある顔に多くのアウトドアファンの支持を受けて来た。

彼を寄こした事からも、雑誌“ビバーク”の本気度が分かると言うものだ。

だけど天気が……本當に何とかならないものか、これ。

「任せろ！あたしに秘策があるズラ!!」

古いカーテンを被って即興のてるてる坊主のコスプレをした千明が、なかばヤケクソ気味に

そう叫ぶ。その有様から秘策とやらが全くアテにならないのは分かり切っているが。

◇

◇

◇

「ひええええええ．．．つて、この声、大垣さん？」

陽渚の指摘で、ようやく未だにてる坊主なのを思い出して、がばっ！と顔を出して

て
両手を握ったままがぶり寄る千明。

「このピンチを救えるのは君だけだ！鶴木嬢は名前に“陽”の文字がある。いやそれよりも

“ヒナ”という名前の女子は晴れ女と相場が決まって．．．」

「どこが秘策やねーんっ！」

追いついてきたあおいにスパーン！と頭をはたかれる千明。

「そういえばそんな名前のヒロインの映画がなんかあったねー」

「あ、それ知つとる。しかも確か主人公の名が“ほだか”やったねえ。鶴木、夏海と協力

してお天気よろしく。」

綾乃と黒岩が呑気にそう続ける。陽渚は「無茶言わないで」と涙目になり、その後ろでは

大野がおろおろしていた．．．どうしようコレ。

「ま、まあとにかく、出来る事をしようよー！」

なでしこのポジティブさが今は救いだろう。この雪が止んでくれる奇跡に僅かな望みを

託して、受け付けや元旦用の準備、炊き出しやフォトコンの用意を始める一同。

12時過ぎ。この天候にもめげずにキャンプを敢行するストロングスタイルキャンパーが

ぼつぼつ到着し始める。その中に彼女たちの恩師の姿もあった。

「鳥羽先生、それに・・・冬美ちゃんも！来てくれたんだー。」

「おいおい、今は大町先生だろ。」

受付する恵那に千明がツツコむ。鳥羽美波はもうずっと前に同じ職場、本栖高校

教員の太町先生と結婚していたのだが、やはり未だに彼女らの顧問は鳥羽先生のイメージが

抜けないでいた。

「ご苦労様です。」

管理棟での受付をすませる美波の後ろで、スカートの裾をギュツと掴んで隠れているのは、

彼女の愛娘、大町冬美（7歳）だった。

冬美は引つ込み思案な性格で、このキャンプもあまり来る気はなかったのだが、

お母さんの古い友達の子息さん（同い年）も来るといふことで、なだめすかして引つ張ってきたのだが・・・面識のある恵那達にさえこの有様である。

「じゃ、設営に行きましょう、冬美。」

「・・・寒いからイヤ。」

そう言つて管理棟の薪ストーブの前から動こうとしない冬美。名前の割に寒いのが苦手な

彼女にとつて、この雪降る中で外でテントを張つて泊まるなんてありえなかつた。

やれやれ困つたねえ、という表情の一同。これはいざとなつたら自分達と一緒に管理棟で

年越しかな？なんて空気が流れていた、その時だつた。

—うおおおおつ！雪ばい、雪ばい、すごか積もつとつとよー！やつほおーつ！！

しんしんと張り詰めた静けさのキャンプ場に、南国の元気を詰め込んだような歓声とどろが響いた。

第11話 ぼーいみいつがーる

「あーっ！来た来た、あれだよね大野さん!!」

山道を登り切り、駐車場に入つて来た一台のトラックを指差して叫ぶなでしこに、大野が

うんうんと頷く。待ちに待った帆高夏海と小谷さやか、そして振る舞い鍋用の目玉、南国九州の海産物到着である。

「おーい、みんなひっさしぶりー!」

「夏海ちゃん！変わらへんなあー!」

助手席からぶんぶん手を振つてはしやぐ夏海に、かつてペアを組んだあおいが笑顔で返す。

奇しくも二人とも教師という進路を選択した、正反対に見えてどこか共通点の多い両者。

なでしこの誘導でトラックをバックさせて管理棟際の屋根付き調理スペースに付ける、

停車した瞬間、真っ先に空いた後部座席のドアから一人の少年が勢いよく飛び出した

!

「うおおおおおっ！雪ばい、雪ばい、すごか積もつとつとよー！ー！やつほおーっ!!」
まるで初めて雪原に投げ出された子犬のように大はしやぎで駆け出し、そのへんをぐるぐる

駆け回ったかと思うと、雪の深そうな斜面に体ごとダイブして小さな人型を残す。

「．．．犬やなあ。」

「犬だねえ。」

「犬．．．可愛い。」

あおいになでしこ、そして大野が微笑ましくそうこぼす。

「いよおーっしー！あたしもーっ!!」

子犬、いや健吾を追いかけて夏海も雪の積もった駐車を駆け回る。

「えー．．．」

「野生児どもめ。」

呆れるあおいと陽渚、いい年して何やってんのよとジト目で眺める．．．が。

「わーたーしーもー！ーっ!」

なでしこまで参戦。このグループわんこ多すぎだろ．．．

「こちら、ていぼう部の先輩で湯浦しずくさん、今回のお魚の保存と搬入でお世話になりました。」

「よろしくー。あたしも10年前と一緒にキャンプしたかったなー。あ、ゆらつて呼んでね。」

夏美の紹介にひらひら手を振って笑顔で答えるしずく。ある意味今回の食材提供の立役者に、千明、なでしこ、あおい、そして恵那が同時に頭を下げる。

「ありがとうございますー！」

「だから小学生みたいなお礼やめろお25歳どもー！」

山梨勢のノリツツコミに思わず笑いがこぼれる熊元本一同。

「で、こつちがあたしの息子の健吾です。」

「小谷健吾たい、よろしくばい！」

腕をぴん！と垂直に掲げて、その色黒の顔でにかっ！と笑顔を見せる。応えてよろしく！

よろしくな！となでしこと千明がそう返す、アクションが激しい者同士気が合うようだ。

そうでない3人は健吾を眺めながら同じ感想を心で呟く。

(白州男児だ(だねー)(やなあ)・・・)

「ふっふふ、そしてえー、サプラーイズっ!」

さやかが自慢げにそう言つて、目の前のトラックの荷台をこりっ!と開ける。次の瞬間

ドアに倒れかかっていたビールサーバーがさやかにのしかかつて押しつぶす。ぐえっ!と悲鳴を

挙げた倒れ込むさやかを見て、なるほどさすがビールバカ、と納得する一同。

「あ、本命はこっちねー。」

夏美としずくが担いで降ろした茶色の袋を見て、思わず山梨勢が目を見開いて一斉に叫ぶ。

「お、お米えーっ!?!」

「ウチのたんぼでとれた米ばい、うまかとよー!」

「熊元名産」3界のきらめき」よ、おいしーんだから。」

健吾とさやかが鼻息も荒くふん!と胸を張る。リアクションが重なるあたり流石親子だ。

キャンプ場で自由に使つていいから、とのさやかの言葉に思わずおおくとなる山梨一

同。

「あきちゃん！これ、振る舞い鍋と一緒に出そうよ！」

「いいねえ、やつぱり日本人はお米ツラ！」

「おにぎりにするものいいかも。」

「私得意だから、握るの手伝いますよ。」

思わぬ追加サプライズに感激するなでしこ達に大野が協力を申し出る。これはもう元旦の

朝食は素晴らしく美味なものになるだろう。

「んじゃ、受付しますか。」

食材の搬入を終えた最終到着組一同が管理棟に入る。中は薪ストーブのおかげでぼかぼかと

温かいので、記帳する手がかじかまないのは有り難い事だ。

と、さやかはストーブの際に立つ人物と目が合うと、ぱあっ！と明るい顔になって歩み寄る。

視線の先の女性、大町美波もさやかを見て数瞬固まり、その後満面の笑顔になる。がぼっ！とハグを交わす両者。

「さやか先生ー、お元氣そうで！」

「美波ちゃん、ほんつとお久しぶりね！」

その様を見て千明が、そして夏海が10年前の悪夢を思い出して思わず嘆く。

「・・・グビ姉とビールバカ、ここに再会、か。」

「こりや今夜は爆？みだわ、間違いない。」

「で、悠希はそこで何してんの。」

「アヤちゃんも設営まだでしょ、大丈夫なの？雪ますます降つて来てるよ。」

薪ストーブの前で丸くなっている黒岩と綾乃に、しずくとなでしこのツツコミが入る。

「いや〜やっぱ山梨の冬は寒かばい・・・」

「薪ストーブの引力圏から逃げられないんだよ。」

埒も無い言い訳をする二人にやれやれ、と呆れる一同。

と、その二人の向こうにもう一人、ストーブの前で丸くなっている人物を発見する健吾。

とつとつと、とその少女の前まで小走りに移動すると、白い歯を見せてにかっ！と笑う。

「おっす！」

「・・・こ、こんにちわ。」

挨拶を返しながらも綾乃の後ろに引つ込もうとするのは美波の娘の冬美だ。そんな彼女に

健吾は遠慮も無しに言葉を続ける。

「そとでいっしょに、ゆきだるまつくるつとよー！」

(なに・・・この子?)

冬美は目の前の男の子を見て不思議な感情が湧いていた。地黒な肌に顔、そして不思議な

言葉遣い。自分の知っている男の子とは全然違う、まるで外国の少年に話しかけられている

ような、そんな“特別感”のある存在。

普段から引つ込み思案な冬美は親しい友達はおらず、ましてや男の子など話す事すら

ありえなかった。あまりに自分とは違う存在だと思っていたから、怖かったから。

だが目の前の少年は、そんな冬美の常識を遥かに飛び越えた“異界の者”にすら見え

た。あまりに特別な、遠くから来たまるで宇宙人のような存在。だったら・・・

だから冬美は、普段の自分とは違う答えを返す。地球人を、ううん、山梨県民を代表

して、

ちゃんと相手しないと！

「・・・うん、つくる。」

◇

◇

◇

「わっしょい、わっしょい、わっしょい！」

「うんせ、うんせ、うんせっ！」

7歳の少年少女が降りしきる雪の中、懸命にそして楽しそうに雪玉を転がしている。

その光景を母親2人が見て真逆の感想を漏らす。

「あの冬美が・・・あんな楽しそうにお友達と遊ぶなんて、連れてきて正解だったわ。」

ほろりと涙を流す美波の横で、さやかはやれやれといった顔をする。

「健吾って誰とでもすぐ仲良くなるのよねえ・・・将来複数の女の子に恨まれないか心配だわ。」

本日このキャンプ場に訪れる子供はもういない。雪の降り続けるキャンプ場を2人占めして

大はしやぎで駆け回る男の子と女の子に、他のキャンパーたちも思わず笑顔になる。

こういうのを見ているとどうしてもかまつてあげたくなくなるのが人情と言うものだ。親御さんに

気を使いつつ、ある者は遊びを教え、別の者はあつたかい飲み物を飲ませてあげる。「やっぱ子供はああでなくつちやねえ。」

雑誌ビバークのライター木村が2人を見てふふつ、とこぼす。彼は今、雑誌の記事にする為に、

元野クル+2名とていぼう部の面々に、10年越しに再開した感想や当時の思い出をインタビュー

していたのだが、どうしても目の前ではしゃぐ少年少女に気が行ってしまう。それはもちろん

インタビューを受けている者たちも同じだった。

「うむうむ、仲良き事は美しきかな。」

「ほほえましいカップルだねい。」

「さすがにまだ男女を意識する年じゃないでしょー。」

「中学生くらいまで付き合いが続けばわかんないけどねー。」

山梨県と熊元^{熊本}県。その距離の遠さは彼女たちが誰よりもよく知っている、健吾と冬美

の

邂逅が、今日この時だけのただの“思い出”で終わる可能性は非常に高い。

だからこそ、楽しそうにはしゃいで遊ぶあの少年少女に、まるで漫画のような運命のカップルを思い描かずにはいられない、願わくば末永く縁が続きますように・・・

そんな話を聞きながら、木村はつい先日自分が仲人を務めた新郎新婦を思い出していた。

中学生の時から同級生で、よく教室でもイチャついていた(?) 2人はついに成人するまで

カップルであり続けていた、子供の頃の男女の縁というものは案外続くものだと思っていたから、

感慨深げにこう漏らした。

「案外うまく行くかもよ、あの二人。」

そんなほっこりした空気の中、リンだけは未だにうむむと心で唸りつつ、空を眺めては

スマホの天気予報に目を落としていた。明日朝の予報は先程とは違い、初日の出が見える

可能性が少し増して来ていたことが尚更ヤキモキさせる。

「あとは・・・晴れてさえくれれば。」

深刻な表情でそう嘆くリンを全員が見る。そういえば明日のフォトコンテスト、

このままではダイヤモンド富士が見えないので台無しになる、企画倒れのピンチが迫っている

ことをすつかり失念していた。

「まあ、天気とは喧嘩できんよね〜」

やれやれ、というトーンを込めて嘆いたのは黒岩だ。彼女から見てリンはどこが悪い所が

大野に似てる所があり、思い詰めてネガティブになりがちだ。もつと気楽に生きんばよかとに・・・

「雪見酒コンテストでも全然オツケー!」

木村が笑顔を見せてリンにぐっ!と親指を立てる。アウトドアライター&カメラマンの

彼にとつて、天気に合わせて記事を改変するなどお手の物だ。確かにダイヤモンド富士の

頂上に輝く聖杯に輝く酒を見られないのは残念だが、その代わりに仲睦まじく雪遊びする

子供たちを見れたのでヨシ！と。

そんな二人を見てリンはうあ、と顔を歪める。ああそうだ、『行き当たりばったりも旅の楽しみ。』って昔お爺ちゃんに聞いていたのに、天気急変という事態を楽しめていないじゃないか・・・目の前の二人と違って。

(・・・アタマ固いな、私は)

ふっ、と落ち込んだ後、頭を上げてうっし！とグーを握って気合を入れるリンであつた。

第12話 キャンプファイヤーと大晦日の夜

夜7:00。松ぼっくりキャンプ場の一番下のサイト、土器作り用焚火スペースに組み込まれた

櫓が赤々と燃え上がり、雪のちらつく夜の山を照らし出す。その周囲には今夜をこのキャンプ場で過ごす者たちの全員が集まって暖を取っていた。

運営の千明たち5名、ビバークの取材で来ている木村、そして熊^{熊本}元組や運営の家族などを

含む一般客12組、彼らはここで今年の年越しを迎えるのだ。

「はいみなさん注目！これより明日のイベントのご説明をさせていただきます。」

千明が手メガホンで声を張り上げる。明日になればイベントの目玉、ダイヤモンド富士

フォトコンテストと、南国の食材を使った振る舞い朝食が待っているのだ。

「明日の日の出は7時19分の予定になってまいります、フォトコン用のカクテル希望の方は

今夜のうちに飲み物の名前と、ご希望のグラスを選んでくださいねー。もちろん

ノンアルカクテルもオツケーっす！」

明日の撮影用にカクテルを用意するのは千明の役目だ。原酒&ドリンクはすでに多数

取り揃えており、グラスもまた様々な酒の色に対応したものを用意している。

もちろん各自で持ち込みもOKで、フォトコン用の酒と杯を持ち込んでいる者も多数いる。

「写真はスマホで自撮りでもOKですが、カメラマンの木村さんも回って撮影もして下さる

そうなので、どしどし撮ってもらってください。」

リンがそう続ける横で、木村氏がカメラを掲げてぐつ、と親指を立てて笑顔。アウトドア雑誌や

配信でおなじみの人気カメラマンに撮って貰えることにおおー、と歓声が沸く。

「朝食は朝8時からですよー、お代わり充分ありますから堪能してくださいね。」

なでしこの声に、待ってましたと拍手が起こる。元々この年越しキャンプに来てる人も、

やむなくキャンセルして来られなかった人たちも、この振る舞い鍋はかなりの楽しみだったのだ。

ただキャンセルが多く出た為、消費しきれぬかがネックではあるが。

「私たちスタッフは今夜管理棟にいますので、何か緊急の事態があれば来てください。」
「このキャンペーンファイヤーは夜11時に消火予定です、お好きにだけ暖を取って下さいね。」

あおいと恵那がそう締める、その後は各々が火を囲んでの夕食会になった。

「つて、なでしこも各務原一家もみんなカップ麺かよー」

リンが料理上手の一家のまさかの粗食に驚きを隠せない、自分でさえ生麺と鴨ローストを

使った年越しそばだというのに・・・

「明日がご馳走だからねえ！」

なでしこ父の言葉に全員がうんうん頷く。いいのかなでしこ、自分から料理のハードル

上げまくってるぞ・・・。

「ほい鶴木嬢、ご注文のほうとう出来たぜ！」

「ありがとー、一度食べてみたかったんだあ。」

千明が自分で作ったほうとうを陽渚に渡す。実は明日の振る舞い鍋の一つに地元名

物の

ほうとうを用意していたのだが、それをちよつとフライングして料理したのだ。まあ味付けは

簡素なものだが、すすつた陽渚はもちもちと咀嚼して「美味しー。」と笑顔になる。

「5000円やでー。」

「んぐつ!？」

「うそやでー。」

隣の犬山あかりにそう言われて思わず驚オバーリアクションきの表情で固まる。千明はやれやれと言つた表情で

あかりにこう窘める。

「鶴木嬢はお客様なんだから、お年玉たかるなよー。」

「それはあきちちゃんにだけや。」

チヨップするしぐさであかりにツツコミを千明が入れて3人ではと笑う、どうもあかりは

デザインの仕事をする陽渚にかなり懐いたようである。

「はい、お待たせ。」

大野が飯盒を夏海、あおい、そしてしずくの所に持つて来る。こつちはこつちで持つ

てきた

熊元米を早速炊いて見たのだ。飯盒でご飯を炊くのは色々と気を使うので、明日の朝に備えての

試し炊きでもある。

「んじや缶詰め開けますか。」

「せやな。」

カシユ！パキユ！という音を立てて夏海とあおいが缶詰を開ける。ふたりは前もつてメールの

打ち合わせで、いわゆる「飯の友」な地元逸品を持ち込んでいたのだ。明日のあおいの苦労も

考えて簡単で美味しい夕食を考えた夏海のナイスアイデアに、大野としくも便乗して

舌鼓を打つ。

「あちちち……いい感じにあつたまつたよー。」

缶コーヒーを湯煎していた恵那が黒岩と綾乃に声をかける、ふたりは夕食をコンビニのパンと

コーヒーで済ませるつもりらしい、このへんはいかにもバイク乗りではある。

「ありがとー斉藤さん。」

「助かるつと、夕飯遅らせてすまんばいね。」

黒岩の言葉に恵那がいえいえーと笑顔で返す。彼女はこの湯煎のお湯を使ってこれから

料理をするらしい。といつてもあらかじめブツ切りにしていた野菜と肉と調味料をぶちこんで煮るだけなのだが。

で、問題の一角、グビ姉美とビール波バカさはというと・・・

「木村さんもイケますねえ、ささ、もう一杯。」

「池池」ですか、美味い酒ですよねえコレ。」

「みなみちゃんもビール行きなさいよ、やっぱビールはサーバーでしょ?」

なんと真ん中に木村氏を挟んで、それぞれ持ち寄った一兎樽の日本酒と19Lの生ビール樽を

ビールサーバーに繋いで飯そつちのけで酒を煽っている。

ちなみに木村氏は酒豪でも有名で、この二人に付き合つて杯を空にしても全然余裕でこやかに相手している。それを見て凄いな、と汗を流す野クル(元)＋ていぼう部(元)。

上には上がいるもんだ・・・

「いやあお二人とも素晴らしい、是非ダンナさんとも飲みたいですなあ。」

その木村の言葉にうえ、と固まる二人。美波の夫の大町氏は酒を嗜むとはいえ美波ほどは

?まないし、さやかかのだんなに至っては完全に下戸である。嗚呼、ダンナ方が木村氏くらしい

?めたらさぞ楽しいでしょうに……。

「母ちゃん、カメラマンさんにメイワクかけたらいけんぞ!」

「おかーさん、のみすぎはだめっておとーさんにもいわれてたでしょ?」

向かいで寄り添ってパック寿司をつまんでいる健吾とカップみそ汁をすすっている冬美に

そうツツコまれる母親2人、周囲から思わず笑いが漏れる。

とうかこの2人たった数時間で本当に仲良くなつたもんだ。オマケに完全に今回のキャンプの

アイドルかマスコット役に収まっているし……2人が食べているパック寿司も実は他のキャンパー

からの差し入れだったりする。

と、そこにザツ、ザツ、と雪を踏む足音が近づいてくる。

「遅くなったね。」

そう言って現れたのは恵那の父、潤だ。いつの間にか到着したらしいが、その腕に抱かれている

犬に、思わず驚きの声を上げる野クル勢。

「ち、ちくわだーっ!?!」

チワワ犬種のちくわは寒いのが苦手だ。ましてやもう10歳を超えた老犬、それがこの雪の

ちらつく場所に現れたことに驚きを隠せない。

「恵那は高下たかおりだと言って言ったら急にそわそわし出してね、どうにも落ち着かないから連れて

来たんだ、無理そうなら帰るけどね。」

潤に抱かれたちくわは一同を見てぐいぐいと身を乗り出す。飛び降りる寸前にしやがんで

ちくわを解放すると、そのままみんなの所にダッシュして・・・

手を広げて抱き抱えようとする全員をスルーして、健吾と冬美の胸に飛び込んでいく。

「懐っこいいたいねー、モフモフばい。」

「よーしよしちくわ、いつも可愛いねー。」

「・・・こいつ、ちくわって言っとか？」

ポテトサラダをつめたくなる名前ばい、と呟く健吾にハテナマークを浮かべる冬美。

さやか

熊元名物ちくわサラダの説明をすると、冬美に「食べちやダメー！」と頭をハタかれる。

そんなやりとりを見て、一同は3つに増えたマスコットをほっこりした笑顔で見守る、

それはやがて二人と一匹が寄り添ったまま、すやすや寝息を立てるまで続いていた。

夜が更け、年が明ける。そして松ぼっくりキャンプ場は初の新年を、夜明けを迎える

第13話 だからアウトドアは素晴らしい

富士の山頂に今、まじか円が姿を現す。

「登るぞ、ダイヤモンド富士！」

ひよこっ

「え・・・えええーっ!？」

リンが変顔でそう嘆くのも無理からぬ事。なんと姿を見せたのは丸い物体ではあるのだが。

それは輝く太陽ではなく、光を発しない藍色の玉だったのだから。

「リンーっ、初日の出、釣れたよー！」

見れば富士山頂の淵に恵那が立って、釣り竿でその藍色の物体を釣り上げている。さらに

ポント、と音を立てて引っ張り上げると、玉の下にさらに大きな藍色の玉がまるでダ

ルマの

ように引っ付いて出てくる。

「あ た し か よ ー！」

出て来たのは富士山よりもでっかい志摩リンの顔だった、昔よく結っていたおだんごヘアーが

最初に見えた円だったみたいだ・・・なんだこれ。

—高下名物、ダイヤモンド富士しまりんだんご—

「名前長げーよー！」

「リンちゃん、こつちも爆釣だよー。」

なでしこの声に振り返ってみれば、なんと後ろは芦方のていぼうでみんなが竿を出している。

「っておい！南アルプスどこいった!？」

「こつちも釣れましたー！」

「おー、また釣れたばい、生きの良さそうなシー・マリンたいね。」

「それもあたたし かよー！」

水中からまるでクラゲのような水菓子を、ご丁寧にリンの絵が描いてあるその謎物体を

次から次へとクーラーボックスに投入する野クルとていぼう部の面々。それはやがて

クーラーボックスから溢れ出し、大軍となってリンの方に向かって来る。

「ひ、ひえええええっ!」

白目をむいて逃げ出そうと振り返れば、富士山からは先程の巨大しまりんだんごの大軍が

なだれ落ちて来ていた。

しまりんだんご軍とシーマリン軍が今、海と山の狭間で激突する!

◇

◇

◇

—ピピピツ、ピピピツ—

スマホの目覚ましの音でうつすらと目を開けるリン、手に取ってアラームを止めると誰に向けるともないジト目で一言嘆いた。

「・・・なんだ今の夢?」

1月1日、午前5:30。すでに管理棟の中にはリンしかいない、おそらくみんなもう起きて

今日の仕込みに入っているのだろう。自分も一緒に起きると言ったが、雑誌取材の仕事が

控えているリンはゆっくり眠るべきだと皆に勧められて、起きる時間を遅らせていたのだ。

「あ、リンちゃんおはよー。あけましておめでとう!」

管理棟から出たリンをなでしこが、そして準備にかかっている皆が出迎える。

あおいが米を洗い、大野が魚介の出汁を取ってアクをすくい、黒岩は眠そうに欠伸をしながら

恵那と一緒に魚に包丁を入れている。

「次、ロックグラスにウイスキー2、ジンジャエール6、残り2は氷だからあとでな。」

「りよーかいつす！」

千明、陽渚、そして夏海の3人はカクテルの準備担当だ。千明がブレンド比の指示を出して、

陽渚がグラスを、夏海が飲み物を持ち寄ってグラスに注ぐ。ちなみに千明はワイシャツに

ジャケット＋蝶ネクタイというバーテンのコスプレまでしている凝りようだ。

「コーゆーのは形から入るのが大事なんだぜ！」

似合っではいるがいかにも寒そうで、白い息をかじかむ手に吐きかけながらもカクテルを

制作していく。ちなみにホットカクテルは本番直前でなければ冷めるし、ノンアルコールは

凍りつく恐れがあるのでやはり後回しだ。まあ注文の大半が氷点の低いアルコール

入りだったので

事前準備が進められるのは助かるのだが。

「空は・・・未だ微妙か。」

リンが息を吐きながら空を見上げる。まだ夜は暗く天気ははっきりとは分からないが、

雪は小康状態でちらついているし、星が見えない以上晴れているわけもない。

つい先ほど見た縁起でもない夢を思い出して、うあ、と息を吐く。

その様を、魚を捌きながら見ていた黒岩がふう、とため息を漏らす。あのダイヤモンド富士に

対する執念ともいえる志摩さんの想いは本当に凄かね、と。

「おはようございます。」

「あ、木村さん、新年あけましておめでとうございます。」

テントからカメラを手に出て来た木村と挨拶を交わすリン。木村は皆に許可を貰って

仕込みの風景もそのカメラに収めていく。

ひとしきり撮影を終えると、サイトの隅っこに移動して電話している、どうやらビバークの

編集と連絡を取っているようだ、もうすでに完全に仕事モードに入っている、流石プロだ。

「木村さんはいつからカメラを？」

戻って来た木村にリンがそう質問し、周囲のみんなも思わず手を止めて聞き入る。ちよつと太った温和な顔の、まるで相撲取りのようなイメージのある彼がどうしてこういう仕事をしているのかには興味を惹かれる。

「中3の時だね、ちようど卒業アルバム委員に指名されて、いいカメラを使う機会に恵まれたんだ、それからすっかりハマっちゃってねえ。」

なるほど、写真に凝ったことで被写体を求めてアウトドア嗜好にはまったというわけだ。

その後は逆に、みんながどうしてキャンプや釣りにハマったのかという話になった。

普通に家族の影響というものから、冬の本栖湖で寝入って真っ暗になってしまい

キャンプ少女に救われたとか、たまたま知り合った人に勧められてタコを釣ったはいが

迫り来る軟体動物の恐怖に腰が抜けて、助けてもらおう代わりに強制入部させられたとかの

奇想天外な理由まで様々な逸話が飛び交っていた。

会話が弾み、仕込みが進むに依じて時計の針は進む。地平がうつすらと明るくなる

6時ごろには他のキャンパーたちもそろそろと起き出して来ていた。顔を洗い、

ジャケットを羽織って狙った撮影ポイントを確認したり、振る舞い鍋の中身を

興味深そうに覗き込んだりと、みなこの後のイベントを心待ちにしているようだ。

6:30。健吾と冬美がそれぞれの母親を引つ張ってテントから上がって来る。ちなみに

2人はタベ同じテントで、しかも同じシユラフで寝たらしい。まあまだ7歳だし、南国少年の健吾と

寒がりの冬美にとってお互いは、さぞ寒さをしのぐいいカイ口になった事だろう。

もつとももし今後も付き合いが続いたなら間違いなく赤面の黒歴史になるだろうが。

最後に起きて来たのは恵那の父、斉藤潤とちくわだ。結局ちくわはこの寒さも

なんのその、寒そうなそぶりも見せずにくつすり眠ったそうだ。よほどのキャンプ場が

肌に合わせているらしい。

「さてみなさん、初日の出まであと40分です、フォトコンテスト参加希望者はグラスを持ってスタンバイにかかって下さい。」

千明がそう言って並ぶ皆にグラスを渡していく。いよいよ裁定の時、果たして

ダイヤモンド富士は見られるのか・・・？

「あ・・・あれ、犬山さん!!」

「なんや?まさか・・・朝焼けや!」

夏海の驚きに応えるあおい、明るみを増す富士のふもとが赤く焼けていた。

「昨日の雪!それが南下してあのへんに行ってるんだよ!」

なでしこがぐっ!と拳を握ってドヤ笑顔を見せる。朝焼けは前後の天気が悪い方が

より綺麗な赤みを見せるものだ。昨日降った雪が逆に思わぬ絶景を見せてくれそう
だ。

「しかもうまい感じに山頂付近は雲がかかってませんね、これなら・・・」

「頼むうっ!このまま、このままあつ!!」

美波の期待に思わず祈りの言葉を吐く千明、このままいけば朝焼け+ダイヤモンド富士
という

期待を超える絵が見られるではないか・・・!それに呼応して全員がわくわくを掻き
立て富士山を

注視する。このまま、このまま来い、初日の出!

地平付近の空が真っ赤に焼けた状態で。どんどん明るさを見せる空。もう富士山の

かからない

所では日の出はすんでいるだろう……あと少し、もうすぐ、もうすぐっ！
「……あ、あれ！」

大野の言葉と同時に全員がはっ！と色めき立つ。今まさに富士山頂が輝かんとしている時に、

彼女が見つけた大きなリングが姿を現したのだ。

「うおおおーっ！虹ばい、虹が輪つかになつとつとよーっ！」

「きれい……すっごくきれい！」

すでに富士の山頂付近まで達した太陽の周囲、ちょうど富士山のふもとの外までかかる

大きなリングが、美しい7色の輝きを発しているではないか。

「ハローいや、幻日げんじつじゃないか……」

木村がカメラを覗きながら思わずこぼす。ごくまれに見られる太陽の周りを囲う大きな虹、

日の出や日の入り時に見られるそれは幻日げんじつと呼ばれ、幸せを呼び込む非常に縁起のい

自然現象として知られていた。

朝焼け、幻日、そして今……ダイヤモンドの輝きを備えた朝日が、富士山頂からのその光が

松ぼっくりキャンプ場の新年を照らし出す。

誰もがその幻想的な状況に固まっていた。プロの木村はさすがにシャツターを切り続けているが、他の参加者はこの美しすぎる光景にスマホを構える余裕さえない。

特にリンは今までの心配事がまさにひっくり返るように最高の状態になったことに、思わず感動して目から熱いものを流す。

「志摩さんの執念が呼んだ景色やね。」

そのリンの肩に手を置いて黒岩がそう告げる。そう、自分は「天気とは喧嘩できない」と言い、

木村は「雪見酒フォトコンでもOK」と言っていた。だがリンだけは最後までダイヤモンド富士の

初日の出を願っていた。

ならばこの日の出は、そのリンの意思こそが呼びこんだのだろう。

「・・・綺麗ですね。」

涙を拭こうともせずに、美しさの3重奏、いや富士山も込みで4重奏に見入るリン。こんな美しい風景が見られる、想い描いた景色を超える世界を堪能できる、身近な友人と、

懐かしい仲間と、同じ趣味を共有する人たちと一緒に。

本当に、アウトドアって素晴らしい。

思わず一步踏み出したリンの足に、何かがコツ、と当たる。

彼女はその感触を知っていた、キャンプを始めてからずっとの付き合い、それはどうとう

ひとつのキャンプ場の名前にまでなった。そんな木の実をかがんで拾い上げ、目の前の美しい

輝きにかざして、そのシルエットを楽しむ。

その松ぼっくりは、ごく当たり前にリンに話しかける。

＼アケマシテオメデトウ／

第14話　グビ姉vsビールバカ、霊峰富士の聖杯大決戦！

富士川松ぼっくりキャンプ場に朝日が昇る。背後に朝焼けを、周囲に虹の輪を、そして直下に

霊峰富士をたずさえて、一年の初まりを神々しく彩っていく。その幻想的な景色に職員も、

宿泊客も、そしてダイヤモンド富士初日の出を見に来たドライバーやライダー達も、言葉も無く見入る。

「・・・で、フォトコンしなくていいんですか？」

シャツターを切り続けていた木村がそう言った瞬間、ああっ！忘れてた！と、ばたばたと

動いてスマホを取り出し、持っていたドリンク入りグラスを様々に掲げて、いい構図を

狙って写真に収めていく。

とはいえ逆光ゆえにさすがに各々悪戦苦闘だ、やはりこうなればプロの木村に撮影依

頼が

殺到してくる。

その初っ端を切ったのは小谷さやかだ。あらかじめ持ち込んでおいたテーブルにビールの

サーバーをドン!と置いて、そこからジョッキにビールを注ぐとジョッキを太陽にかざして

ごっごっごっごっごっごっ!と一気にジョッキを空にする。

「ぶはあ~~~~うめえ。」

口元をビール泡だらけにして、げふう、と息を吐くビールバカ。その一連の流れは木村の

カメラによってしっかり収められている。いやフィルムが無駄だろこれ・・・というかこの

コンテストの意義分かってます?美しい景観が台無しでしょー。

続いての被撮影者は黒岩悠希。なんと彼女のロングヘアが頭上にキツネ耳に纏められた

状態での登場。後ろでは恵那が満足顔でパンパンと手を打ち払う、彼女の仕込みか。

持っているのは瓢箪ひょうたんと浅底おちよこの御猪口だ。その見姿でそれを持たれると、どこの

お稲荷さんの変化かと言いたくなるほど似合っている。

大野がチヨイスしたのは「エンジェルキッス」という濃い赤色のカクテル、それを氣に恥ずかし

そうに太陽と富士山に掲げて「お・・・お願いします」と引き腰で言う。

「おー、いいチヨイスです、ねえ大野さん、カクテル言葉を狙ってますね?」

木村の指摘にこくり、と赤面して頷く大野。このカクテルには『貴方に見惚れて』という

酒言葉がある、先程まで初日の出に見惚れていた一同にとつてはナイスチヨイスだ。

濃い赤色も朝日の輝きを受けていい色を醸し出している、これはポイント高そうだが、次に登場した湯浦しずくがそんなムードを完全に吹き飛ばす。

「ひ、ひいいいいっ!!」

陽渚をはじめ心臓の弱い面々が悲鳴を上げる。ビール大ジョッキの中になみなみと焼酎が注がれているのはいいんだが・・・中に丸々一匹いるヘビが怖すぎるんですが。

「ま、まあまむしドリンクとか、ハブ酒とかのチヨイスかあ、さすが白州人。」

さすがの恵那も冷や汗をかきながらそうこぼす。その横で黒岩がうわー、という顔で心で嘆く。

(アレ今朝早うに冬眠しとったヘビを、掘り起こして捕まえたヤツなのは秘密にしとか

んば……)

何人が挟んで次に夏海が登場……手にしているのは何とヤカンとお湯呑みだ。

コポコポと音を立ててお茶を注ぐと、それをずずつ、とすすつてご満悦の表情で一言。「やっぱ富士山が見える所で飲むのは、静岡のお茶でしょ。」

—びりいっ！！！—

その瞬間、空気が硬化した！

「……え、何？なんか空気が重いんですけど??」

夏海が冷や汗を流してきよろきよろと周辺を見渡す、何かあったのかな？

「反梨者はんなしものや。」

「反梨者やねえ……」

左右からあおいとあかりに、がしっ！と腕を掴まれる。二人とも目が怖いんですけど……

「残念だ、帆高嬢がまさか反梨者だったとは……」

「夏海ちゃん、君の事は忘れないよ。」

千明と恵那に両足を持たれて、まるでハンモックのように持ち上げられる夏海。

「え、なに？なんなの……?」

「ハイホーハイホー♪ハイホーハイホー♪ハイホーハイホー♪」

問答無用とばかりに4人に管理棟まで連行される夏海、その様を呆然と見送る芦方勢。

他のキャンパーの撮影が進む中、管理棟から出て来た夏海？は直立不動の体制のまま死んだ目をして、スライドするようにこちらに進んで来る、まるでラジコンのように。「フジサンハヤマナシガサイコー、フジサンハヤマナシガサイコー、フジサンハ．．．」
変わり果てた夏海の姿に芦方勢が混乱して大騒ぎする。陽渚は夏海にすがり付いて正気に戻ってー！とパニックだし、大野はひたすらおろおろするばかりだ。
ちなみに今管理棟の中では、ジャケットを脱いだ夏海と、それを着せられたジャンケ

ン

マシンのジンジャー君をラジコン操作する恵那十3名が腹を抱えて大笑いしていた。
フोटコン用ドリンクが決まらなくて悩んでいた夏海に、あおいが「ネタ枠やらへん？」と

声をかけて来たので嬉々としてそれに乗ったと言う訳だ。

無論、夏海は後で真相を知った芦方勢全員にゲンコツを貰ったのだが、それは別の話。
健吾と冬美は千明の勧めで、レモンジンジャーとメロンジンジャーを透明グラスに掲げ、ふたり並んでの撮影となった。ジンジャーエールの琥珀色とメロンの緑やレモンの黄色が絶妙に溶け合って、えもいわれぬ輝きを放っているし、それを掲げる

少年と少女の笑顔がまたニヤニヤを誘ってくれる。この二人の時には他の撮影者も殺到したほどだ。

犬山あかりはかねてから憧れていたマティーニを初体験、上品に香りを楽しんで：：「うわこれきつっ！」

思わずうへえ、という顔をカメラに向ける。元々が酒精のキツイお酒であり、普段口にしていない強烈なアルコール臭に閉口気味だ、ダイヤモンド富士をバックにして、大人の女性らしく優雅に酒を飲む計画は頓挫した模様。

土岐綾乃はなんと、人型マミーシユラフのままジンジャーハイを持って現れた。

「シユラフむしがシユラフ原人へと進化したな。」

辛辣に評価するリン、つか撮影するんだからもーちよつとマシな格好でしろよ：：。「アヤちゃんそれ買ったんだ、今度月面着陸ごっこしようよ！」

なでしこの相変わらざるの発想に、千明とおおいは「変わらねーなあ」と思わず苦笑い。

他のキャンパーの撮影が進む中、陽渚と美波はもうちよつと後で、と注文を付ける。

出来れば富士山の青が見えるようになってから撮影したいとの事。なるほどダイヤ

モンド富士は

山が完全な逆光になるため、少し待たないと富士山がシルエツトで真っ黒な状態なの

だ。

参加者全員の撮影が終わり、ここからは運営側の出番と相成った。

彼女は今日の昼まで仕事なので基本ノンアルカクテルだ。

各務原なでしこはベルモットというカクテルをベースに様々な香辛料を投入したいわゆる

スパイスカクテルだ。料理に凝る傾向のある各務原家には様々なハーブやスパイスがあり、

それを様々に研究、試飲を繰り返して出来た“なでしこスペシャル”だそうだ。

・・・ちなみに色合いはダイヤモンド富士に全く合わなかったが。

斉藤恵那は右手にソルティドッグを、左手にちくわを抱いて登場。見た瞬間に狙いが分かる

チヨイスだった。彼女はあんまりお酒は飲まないらしい。

犬山あおいは地元山梨の白ワインで参戦、それなりの値段のワインを火にかけてアルコールを

わざわざ飛ばしてから冷やし直してワイングラスに入れたその色は、彼女の薄いブルンドの

髪色と見事に溶け合って、背景に負けない美しい絵を見せていた。

・ ・ ・ただ当たり前だが、飲んでみたらただのすっぱいジュースでしかないのだが。大垣千明は思い出のキャン普初カクテル、ホット・バタード・ラム・カウで勝負。

太陽にかざすのではなく、寒さを感じる雪山で優雅にハンモックチェアでくつろぎ、

あつたかいカクテルで湯気と白い吐息を楽しんでいる様子を撮影して貰った、これは技ありのショットだ。

リンは不参加。このフォトコンはビバークとしやちほこさんぽがそれぞれ審査して大賞や優秀賞を雑誌で発表することになっている。さすがに雑誌のライターが参加するのは

ためられたのだ。

「しまりんだんご、あるよー。」

「シー・マリリンもあつたい。」

「いらねえよ、てかそれでどんなカクテル作るんだよ!」

創作饅頭と創作水菓子を手にした恵那と黒岩の提案は全力で却下しておくリンであつた。

「よーし、いよいよ出番だね!」

太陽がかなり高くまで登り、富士の青と山頂の雪の白がくつきりと見え始めた時、

陽渚が手にした逆三角形のカクテルグラスに青いお酒を注いでいく。

「お！ブルーハワイか・・・でもそれだけじゃイマイチじゃないか？」

「ふっふっふ、仕上げを御覧じろ、ですよ大垣さん。」

そう言つてポケットから小さな瓶を取り出すと、なんとスポイトで吸い上げてから

そのカクテルグラスの底に注いでいく。その白い液体を見ておもわずあかりが質問する。

「それ、何なん？」

「実はこれ、カルピスの原液なんだよ。」

周囲が一齐に、はっ？という顔をするが、あかりだけはあつ！そうか、という顔で

ポンと手を打つ。

「そう、＼逆さ富士＼なの！」

笑顔で富士山にカクテルグラスをかざす陽渚。なるほど逆三角形のグラスは逆さ富士の

形だし、ブルーハワイの山裾とカルピスで山頂の雪を表現しているということか。

酒は比重が軽いので上に浮き、逆に比重の重いカルピスはしっかり底に溜まつて混ざらない

というわけだ。

「おおー、いい絵ですなあこれは。」

木村が太鼓判を押してシャッターを切り続ける。発想は単純ではあるが、そういう物ほど

ハマると驚くほどいい絵になるものだ。

「じゃああとは先生・・・あれ?」

「そういえばさつきから姿が見えないな、鳥羽先生。」

一同がきよろきよろと周囲を見回すも、グビ姉こと美波の姿がいつの間にか消えていた。

と、駐車場の方から声。

「おーい、大垣ー、犬山ー、久しぶりだなあ。」

ワゴン車から降りて来た中年男性を見て、千明とあおいが、あーっ!という顔でその男性を

指差して叫ぶ。

「大町先生!」

大町悟。かつて高校時代、野クルの創設当初に面倒を見てもらっていた登山部の顧問の先生。

鳥羽先生と結婚してからは他校に配属となり、なかなか会えなかった恩師ともいえる

人物。

「いつ来たんですかー!?」

「ホンマお久しぶりですー。」

と、邂逅を満喫する暇もなく、そのワゴン車の後部座席が開いて一人の女性が降りてくる。

その身に色鮮やかな晴れ着をコーディネートして。

「うおっ！グビ姉・・・美波先生っ！」

「化けたなあー、どしたんですか、その晴れ着？」

「悟さんを持ってきてもらったんですよ、せっかくプロの方に撮影して頂くんですからこのくらいは、ね。」

晴れ着と言っても、普段着の上から羽織れるシンプルなものだが、何せここはキャンプ場、

こんなひらひらした汚れ厳禁の服などそうそう着られない、なので夫の悟にわざわざ持ってきて

もらっていたのだ。

朝日が輝き、日本の象徴と言える富士山をバックにして、晴れ着姿の女性が樽からひしゃくで

酒を木の枀に注ぎ、笑顔でそれを飲み干すその姿は、まさに日本の正月に相応しい絵であった。

「・・・素敵。」

「こりや反則だわ。」

「大賞はコレで決まりかな？」

さすがに周囲からも絶賛の声が上がる。たださやかだけは「みなみちゃんの裏切り者。」と

ぶーたれていた。まあ最初にあの狂態を演じてしまつて、同じように樽酒を煽つてくれると

思っていたらコレなのだから無理もないかな。

後日、発売されたビバーク正月号の表紙が、まさか富士山をバックに豪快にビールを煽る

さやかちゃんだとは、この時誰も想像していなかった・・・。

第15話 振る舞い鍋であつたまろー。

「はい、いっぱいありますからたくさん食べて下さいねー」

午前8:00、新年イベントもうひとつの目玉、宿泊客限定の無料振る舞い朝食のスタートだ。

管理棟の横のスペースに長机が並べられ、5つ置かれたガスコンロの上のズンドウがあつたかそうな湯気を立ち昇らせている。

この5つの鍋、実は全部違う料理で、参加者は腹の限界まで食べ比べを楽しむことが出来る

ようになつている、さつそく各鍋の前に行列が並び、各々の鍋を調理した担当者がスチロールの

椀によそつて箸を付けて手渡していく。

恵那の担当はあつさり塩味のつみれ浜鍋。様々な海産物でダシを取った後、湯がかれた身を

骨からこそげ取り、調味料と片栗粉を加えてフードプロセッサーにかけてつみれ団子にして、

仕上げに一味を軽く振りかけた、一番「海」を感じる一杯だ。

「おおう、磯の香りがいいねえ、山でこれを味わえるなんて贅沢ヅラ。」

この一杯、海なし県である地元や長野県からの来客には特に受けがいい。

隣では大野がガラガブやアカハタなどの根魚でダシを取った味噌汁を振舞っている。
南国の魚に

甲州味噌を合わせた、熊元熊本と山梨の合作おみそ汁だ。仕上げにアジのかんぼこを二切れ乗せて

味わっていたのがさらに好評だった。

その横では、なでしこが海鮮トマト鍋を振舞っていた。こちらも芦方の魚に山梨のトマトを

ミックスさせた地域クロスオーバー合体鍋だ。事前に魚を送ってもらい、さらに一足先に山梨入りした

大野となでしこ一家によって完成を見た二品、和風と洋風の汁物の対比がまた素晴らしい。

あおいが担当しているのは魚と野菜やキノコたっぷりの水炊き。ポン酢にカボスを絞って頂く

水炊きは寒い山の朝に染みわたる温かさと美味さがあつた。鍋としては無難だがそ

れだけに

ハズレない安心の味だ。

「で、なんで私の所には誰も並ばないんだよっ！」

地元のほうとう鍋を担当している千明が仏頂面でそう嘆く。彼女の前にいるのはしずくと健吾

くらいで、他の鍋の盛況ぶりに比べて寂しい限りだ。今回の雪で遠方からのキャンセルが多数出た

為に、地元のほうとうは今一つ新鮮味に欠けたようだ。

「やっぱ、これめっちゃ美味いよ、ねえケン坊！」

「うつつつつま!!これめっちゃウマかばい。」

しずくと健吾が立ったままほうとうをすすって驚愕の声を上げる、じっくり煮込んでかぼちやや

野菜の甘みと旨味がしみ込んだスープに、しっかりもちもちした麺がベストマッチだ。

「あ、私あとで頂きますよ。」

「あたしもー!ほうとう楽しみ。」

「あたしも頂くったい。」

机の向こう側で芦方勢が手を上げる。遠征して来た彼女らにとって山梨のほうとうは

楽しみの一つだ。今やつてる手伝いが終わつたら存分に楽しむつもりでいる。

彼女たちが担当しているのは焼きおにぎりと骨せんべいだ。調理で余つた骨は油で二度揚げ

すればサクサクと美味しいスナックに化けるし、その上生ゴミも減らせるので一石二鳥だ。

熊元熊本から持ち込んだ米はあらかじめ飯盒で炊いておにぎりにしてある。食事時に握つたのでは

並ぶ客に追いつかないし、前もつて握つておくとこの寒さじゃ冷たくなる。なのでかまどの上に

鉄板を引いて醤油を垂らし、焼きおにぎりにして出しているのだ。

「おいしー。おさかなのホネつてこんなにおいしいんだねー。」

冬美が右手におにぎりを、左手に骨せんべいを手に、左右交互に頬張つてご満悦のご様子だ。

「いやあ美味しい！キャンプ飯の範疇超えてますなあ。」

木村が机のトレイに全ての鍋と食べ物を並べて撮影した後、それを次々にがつつきながら

そう感想を漏らす。さすが一流のアウトドアライター、肝臓も胃袋も並ではないらしい。

「す……すごいですね。」

撮影の手伝いをしつつ自分の腕とおにぎりを手にしたリンがそう漏らす。彼女は何人か

料理の感想をインタビューした後、ようやく自分の分を貰って来た所だ。とはいえゆっくり

食べている暇は無い、食べ終わったら少しでもみんなの手伝いをと、自然と箸も早くなる。

そんなこんなで進む振る舞い鍋。が、やはりキャンセルが出た分消費が追いつかない。

スタッフ一同は顔を見合わせて、うむ！と頷き合った後、駐車場にたむろしている人々にも

声をかける。

「振る舞い料理、みなさんもいかがですかー！」

千明の声掛けと同時に、駐車場にいた『初日の出を見に来ただけの面々』が待つてましたと

ばかりに殺到してくる。Webでこの振る舞いを知っていた者も居れば、初日の出を見に来た

その際で美味しそうな鍋を見せられて、お腹をぐうぐう鳴らしている者もたのだ。だがキャンピに

来てくれた人をどうしても優先する必要があつた為、目途がつくまでは解放できなかったのだが

ここにきてサービスタイムの開始である。

・・・ちなみにグビ姉とビールバカは初日の出撮影時に持ち出した机の上に置かれた樽酒とビールサーバーの横で酔い潰れて爆睡中だ。この分ではお鍋も余りそうにないので、後でクレームが来そうであるが、まあ自業自得だろう。

なでしこが全ての鍋の最後の一杯をすすずつ、と飲み干し、それをことごと机に置いて

手を合わせ、ごちそうさまのポーズを取った瞬間、周囲の全員が一齐に声を上げる。

「完食達成——っ！」

今回芦方から持ち込んで調理した振る舞い朝食は、彼女の最後の一杯できれいさつぱり

無くなった。が、誰も食べ足りないというわけでは無く、みんな今年最初の食事を心ゆくまで

堪能できた。

「いやあー、うまかったばい！」

「おさかなおいしかったねー！」

健吾と冬美が笑顔でそう白い息を吐く。すっかりお馴染みの本キャンプのマスコットの二人に、

大町悟がヒザを曲げて目線の高さを合わせ、ふたりの頭に手を置いて話しかける。

「健吾君だったね、冬美と仲良くしてくれてありがとう。」

いきなり頭を撫でられて、びくっ！と硬直する健吾。だが冬美がえへへー、という顔をすると

健吾もまた鼻をすすりつつ、にかっ、と笑顔を悟に見せる。

「ゆきがつせんすつたい！」

「うん、やろーやろー！」

子供は元気だ。さっそくサイトの下に降りて、踏み荒らされていないスペースで雪合

戦を

始めるふたり。それを見てしずくや綾乃、あかりなどの女性陣が参戦し、呼応して悟や

リンの父の渉、恵那父の潤+ちくわ、なでしこ父の修一郎などのお父さん連中が童心に

帰って参加する。

「あー、私も行きたい・・・」

その様を見下ろしてなでしこがそうこぼす。だが彼女たちには食事の片づけという任務が

残っており、それをおろそかにするわけにも・・・。

「さしとりあえずより遊ぶ時は遊ぶりたい！片づけは後でもよかる？」

そう言ってエプロンを外してすたすたと歩いていく黒岩。それに応えて夏海があおいの手を取り

引つ張って雪合戦に突入、その流れに乗ったなでしこが大野の背中を押してなだれ込んでいく。

恵那は「結局こうなるのねー。」とこいつつ、奮戦しているちくわに加勢すべく駆け降りていく。

「おいおいお前ら！片づけ・・・」

「まったく、しようがないなあ・・・」

残された千明と陽渚はやれやれ、という顔をして見下ろす。みんな子供か、と思いつつも

2人は顔を見合わせてしばらく固まった後、にやりと笑って同じ意見を述べる。

「行くか！」

「行きましょう！」

かくして松ぼっくりキャンプ場は雪合戦の川中島と化すのであった。

その様を居並んで撮影してるリンと木村。大人も子供も楽しそうにはしゃぐその絵を見て

2人は思わず感想をこぼす。

「いい記事になりそうですね、このキャンプ。」

「ですなあ、これは気合を入れて記事書かないと、しやちほこさんに負けますなあ。」

木村のその感想にうえっ!?という顔をするリン。天下のビバークに名古屋のローカル誌である

ウチの雑誌が張り合う気なんてさらさら無かったのだが・・・

「い、いや・・・そんな大それたことは。」

「弱気ですなあ、マスコミなんて図々しくてナンボですよ?」

そう言いつつ至近距離からリンの顔をパシャツ、とカメラに納める木村。その一枚をカメラ裏側のモニターに出してリンに見せる。

「ほら、ライターのビジュアルじゃ惨敗ですよ、志摩さんはもつと自信持った方がいいですよー。」

うぐ、という顔で写真の自分と木村を見るリン。確かに見た目は負けてる気はしない、だがその

自信にあふれた泰然自若な表情の木村と、何かにつけて悩み考える自分では、記事のライターとして比べたら到底及ばないだろう・・・少なくとも今のままでは。

ふっ、と肩の力が抜けるリン。この木村も、そして黒岩も自分にならないポジティブさがある。

それは眼下ではしやぐ友人のなでしこにも、かつてはとつつきにくかった千明にもあるものだ、

・・・私も、ちよつとはつちやけるか。

「私たちも行きましたよう、雪合戦!」

「お、ノつてきましたねえ。」

カメラを置いて、下のサイトに駆け下りていくライター2人、仕事はもうここまで。

このキャンプを楽しまなければ、楽しい記事が書けるわけ無いじゃないかと開き直つて

雪と仲間と、そしてアウトドアを満喫する人々と戯れるリンであった。

第16話 大人のけじめ

午前11:00、年越しキャンパーたちの楽しい時間が終わり、チェックアウトの時間となる。

「んじゃ先に帰るわよなでしこ、気を付けてね。」

「家で待つてるよー、なでしこー。」

桜と綾乃がなでしこにそう伝えて車に向かう、各務原一家が撤収を終えて帰宅の途に就くが、

便乗して綾乃もそのまま泊めてもらうことになっていた。最も綾乃はふもとのホテルにバイクを

置きっぱなしなので下山してからは運転して行くのだが。

「ではお先に失礼します、志摩さんも良い正月を。」

「ご苦勞様でした、ビバークの新年号楽しみにしてます。」

ビバークカメラマンの木村も迎えの雑誌スタッフの車に機材を積み込み、仕事を終えてこの

キャンプ場を後にする。ビバークとしやちほこさんほ、両雑誌の編集がここからス

タートだ。

「それはこちらのセリフですよ。あ、写真送りますんで使ってくださいね。」

木村の心遣いに感謝の一札をする。思えばこの取材で彼と共に奔走した経験は雑誌ライター

として、とても貴重な経験になったもんだ。

「鶴木さん、またデザインの話しよーな！」

「うん、是非お願いするよ。」

犬山家の車に乗ったあかりが車窓から陽渚に手を振る。姉の縁で知り合った遠方のプロデザイナーは、あかりにとつて嬉しい出会い、そして良い友人となった。

・・・嘘に引つかかかっていいリアクションくれるし。

恵那の父、潤もちくわを連れて退散。老犬のちくわはさすがに精魂尽き果てたよう
で、潤に

抱かれたままスヤア顔で爆睡中だ。リンの両親や美波の夫、大町悟もすでに家路につ
いている。

これから初詣に行く者、撤収して爆睡する者、あるいは里帰りする者など、ここから
はそれぞれの

予定を追ってキャンプ場を後にする。

これで芦方勢を除く全キャンパーが撤収を完了した。一カ月前から準備に追われたこの

ダイヤモンド富士初日の出イベントは無事に大成功のまま終える事が出来たのだ、本当に

良かった。

すでに山梨県観光推進機構から引き継ぎのスタッフも到着しており、今日宿泊のお客を

迎える準備が始まっている。といっても今日は特にイベントも無いので、来ている2名で

充分に対応できるのだが。

「さーて、ウチらはどうすつたい?」

黒岩の言葉に大野がぼん!と手を打って笑顔で提案する。

「私、この後までしこちゃんの案内でワカサギ釣りに行くんですけど、みなさん一緒にどうですか?」

その提案におお!という顔をする一同。南国^{九州}臼州^{九州}ていぼう部OGの彼女たちにとつて、

氷の張った湖面に穴をあけてするワカサギ釣りは遠い世界の憧れの釣りだ。

「はーい、行く行くー！」

「わたしもー。」

「そりゃ行くつきやないでしょー！」

夏海、陽渚に続いてしずくも参加表明。それを見て黒岩も「んじや私も行くつかね。」と言った後、後ろ指を指して呆れ顔で続ける。

「・・・で、アレギーすつと？」

指先の向こうにいたのは、未だに高いビキで鼻提灯を出している『怪人ブランケット 呑兵衛』

2匹。健吾と冬美が「おきなつせ」「カゼひくよー」と揺り動かしているが、それでも動く気配がない。どうやら10年ぶりの呑み友との再会に普段以上に痛飲したと見える。

「車に押し込んで連行すればオツケーー！」

ひよこつ、と顔を出してそう言ったのはなでしこだ。これから向かう長野県、白樺湖までは車で

2時間弱、運んでいる内に目も覚めるだろう。

「無理言つてすみません。」

「いいよー、ホントは富士五湖でやる予定だったけど、どこも氷結してなくて・・・」

大野が持ちかけたワカサギ釣りだが、山梨県内は現在湖が凍っておらず、舟釣りやドーム釣り

でない釣れない、どうせなら氷上穴釣りのできる長野まで足を延ばして釣る事になった。

「んじゃ、さつそくあの『荷物』積み込むか。」

「ああ、ちよつと待ってー。」

千明が動こうとした皆を制して後ろを振り向くと、あおいたちをちよいちよい、と手招きして

呼び寄せる。改まった態度で千明、リン、なでしこ、恵那、あおいが居並んで芦方一同を見据える。

「このたびは、本当に色々ありがとうございます。」

「ありがとうございますー。」

千明の先導に習って深々と頭を下げる5人。そう、この松ぼっくりキャンプ場の年越し

ビッグイベントは、彼女たちの協力無くしては決して実現しなかった。

「で、これ・・・本当に少しで」

「お金は受け取らんつとよ。」

千明がカバンから出しかけた封筒を手のひらで押さえ、ぐい、とカバンに戻す黒岩。

「い、いや・・・そういう訳には。」

「うむ、これだけお世話になったのだから。」

千明に続いてリンがぐつ、と拳を握って目を光らせる。なでしこと恵那、あおいもうんうんと

頷くが、芦方勢の反応は皆が断固拒否の姿勢だった。

「いいですよ、あたしたちもめっちゃ楽しんだし。」

「私なんて、なでしこちゃん家でお料理までご馳走になったし・・・むしろこっちが払いたいですよ。」

にかつ、と笑って答える夏海と、他の皆に悪いなー、な顔で指先をちよんちよんしながら

小声で続く大野。

「10年も待たせたんですからお金なんていいですよ、ボランテアっていう事にしてください。」

笑顔で続いたのは陽渚だ。かつて芦方まで来てくれた野クルの面々と交わした、今度は

自分たちが山梨に行くという約束。だがそれを果たしたのは、紆余曲折あつて10年

も後の事に

なってしまった。しかも彼女たちが自分たちでキャンプ場を作るといふ偉業を達成していなければ、それこそ立ち消えになる可能性大だったのだから。

「いや・・・これは大人としての『けじめ』です。どうか受け取ってください。」

千明が神妙な顔で再び封筒を差し出す。それはむしろ彼女たちへの礼というよりも、自分たち

山梨県民が他県の厚意に甘えて、礼を尽くさない存在になるのを避けたいという意図が強かった。

食材、運搬、調理、片付けに至るまで助力頂いた遠方の来賓をタダ働きさせるなど、どうして

出来ようか。

「けどさー、それ公費じゃないでしょ・・・みんなのポケットマネーじゃない？」

しずくの言葉に千明たち5人がうつ、という顔をする、どうやら凶星のようだ。一応封筒には

入れているとはいえ、素封筒に領収書らしきものを誰も持っていない状態では、社会人歴の長い

しずくは騙せない。

「ますます受け取れねーって!」

「あたしらの友情はお金で買えるもんやったんやね．．．しくしく。」

手のひらをぶんぶん振りながら下がる夏海の横で、黒岩がわざとらしい演技でウソ泣きをする。

むむむむむ、と向かい合う山梨勢と芦方勢。お互い引く気配の無いまま少し気まずい空気が流れる。

と、その空気を打ち払う救世主が現れた．．．酒臭い顔で。

「んじゃそのお金、みなみちゃんに渡したらいいんじゃない?」

黒岩の肩に顔を乗せながらそう言ったのは、ようやく起きてきた酔っ払いAだ。向か

いでは

酔っ払いBが、え、私に?と自分を指差して不思議そうな顔をする．．．

なんでそうなるの?と全員が彼女に習って不思議顔になる。

「でー、そのお金で今の野クルのみんなに、また芦方に来てもらえばいいのよ!」

全員の空気が固まった後、一斉に「あ!」と声を上げる。

本栖高校野外活動サークルと海野高校ていぼう部。10年前に縁あって交流した両部活は、

あるいはその後も交流が続いた未来もあつたかもしれない。だが思わぬ伝染病の流

行がその

交わりを断ってしまった・・・ハズだった。

だが、その切れた縁を再び繋ぐ方法が思わぬ形で提案されたのだ。鳥羽美波改め大町美波は

現在も野クル顧問であり、さやかからていぼう部顧問を引き継いだ帆高夏海もここに
いるなら

話は早い、最大の懸案である旅費も今まさにここにあるじゃないか！

「それだあああああっ!!」

「すごい、すごいよそのアイデア！」

「すっごくいいですよ、さすがさやか先生！」

「たまにイイ事言うばいねえ、このヒトは。」

全員が笑顔でさやかの提案を絶賛する。そう、自分たちが南国で経験したあの時間を、

今この山梨で見た美しい景色を、部活の先輩として後輩たちに繋いでいけるのはなん
か嬉しくて

堪らなくなる。

世代を超えて縁を深める、まだ見ぬ少年少女に、自分たちと同じ、いやそれ以上のア

ウトドアを

堪能してもらおう『道』を示す、それはなんて素敵な事だろう。

皆が感極まってさやかに群がってもみくちやにする。その様を見てハテナマークを浮かべる

健吾と冬美。

後にていぼう部と野クルの部長を務める2人が、その光景の意味を知るのはもう少し後の話。

第17話 レッツゴー!ワカサギ釣り。

「白樺湖、到着ー!」

「うっひー寒かばい、さすが長野やねー!」

千明、なでしこ、あおいの各車に分乗した一行が白樺湖に到着する。さすがに標高の高い

この地にはチェーン無しでは来られないため、しずくの保冷車は富士川のキャンプ場に置かせて

もらっている。

さあ、いよいよ旅行の締めイベント、南国の釣りクラブでいぼう部OGの憧れ、水上ワカサギ釣りの開始である。既に湖面には何組もの釣り人がテントの場で、また

は中で
小さな釣り竿を垂らしている。

「そんじゃ、またチーム分けして釣る?」

「いーねー。」

かつて芦方で釣ったペア同士が組になり釣果を競うチーム戦方式で釣る事になった。

前回陽渚は

千明とリンとの3人体制だったが、今回リンはしずくとのコンビとなった。グビ姉^{みな}と冬美^{みな}

ビール^さバカ^{やか}＋健吾の4人チームも加えての6組、果たして釣果No.1はどのチームに？
受付でお金を支払い、レンタルの釣り具とエサを買って各人に配る。追加料金を払えば

レクチャーも受けられるのだが、さすがにそこまで拘る必要も無いだろう、釣りは釣れなくても

楽しむものなのだから。

「さーて、どこにする？」

「やっぱポイント探しは重要だし・・・釣れてる人を参考にするのも手かも。」

陽渚の提案に従い、各釣り人の釣果を遠目にチェックする千明。基本ワカサギ釣りは釣ったら

すぐにでも天ぷらや焼き魚にして食べるので、遠目にも釣れてる人は分かる。その人たちの

直線上なら魚の通り道になっている可能性はあるだろう。やがてそのライン上にある一組の

老人のコンビの近くに狙いを定めて移動する。

「すみませーん、この近くで釣らせてもらっていいでしょうか?」

声掛けする陽渚に、二人の老人が顔を上げて笑顔で答える。

「構わないよ。」

「あー、よかとよー。」

・・・

彼らと目を合わせた千明と陽渚が思わず固まる。老人たちも、ん?と目をぱちくりさせた後、

知っている若い女性達を認識して驚きの表情。

「赤井店長!?!どーしてここに?!」

「陽渚ちゃんじゃなかとかー!こんなトコまで来とんやねえ。」

「リンのお爺さ・・・新城さんじゃないツスカー!なんつー偶然ツラー!」

「おお、大垣君か。久しぶりだねえ。」

なんと芦方にいるはずのたこひげや店長赤井繁松と、リンのお爺さん新城肇のコンビが

居並んで釣りを楽しんでいたのだ。肇はふつ、と笑って竿を置き、火にかけている油鍋の中から

箸でほどよく揚がったワカサギをつまんで千明に差し出す。

「ワカサギ・・・食うかい？」

「懐かしいフリーズつすねえ・・・いいん、ですか？」

その声を聞きつけてまずリンが、遅れて全員がわらわらと彼らのもとに集まって来る。

「お爺ちゃん、今年はここに来てたんだ。」

「ああ、ワカサギ釣りのツアーに参加してね。」

彼ら曰く、繁松と肇は縁あつてから度々連絡を取り合い、年に2〜3度のペースでお互い会いに

行つたり、一緒に旅行を楽しんだりしているそうだ。かつて亀ヶ浜キャンプ場でお会い、野クルと

ていぼう部の縁を結んだ二人の老人は伝染病コロナにも歳にも負けず、良き友人の関係を続けていた。

「店長、こんな所まで来て釣りツスか、好きだなあ。」

「がっはっは、まだまだ現役は譲れんたい！」

夏美の言葉に朗らかに笑う繁松。現ていぼう部顧問の夏海にとって繁松は相変わらずお馴染みの

釣具店店主だ。せっかくだからとワカサギ釣りのコツを少し聞いてみた。

「とにかくちっこい魚やけんねえ、アタリは繊細なんでゆっくり合わせるのがコツた
い。」

「シロギスやアジゴのさらに小さい版ですよねえ、アゴも弱いし気を使いそう。」

「水温も低いから食いも悪そうですけど、大丈夫なのかな?」

元ていぼう部のいかにもな釣り人の意見に、山梨勢はさすがと感心しきりだ。彼女らには未経験の

釣りとは言え、さすが餅は餅屋だなあ、と。

「で、エサはコレね。動きと体液の臭いで魚を誘うから死んでしまうと食わないよ。」

「ひええええええええええ!」

て
しずくが手にしたアカムシを見て陽渚がものすごい勢いで後ずさり、氷で足を滑らせ

尻もちをつき、そのまま氷上を滑っていく・・・餅は餅屋の前言撤回。

入
各自がポイントを決めて氷上ドリルで釣るための穴をあけ、虫エサを刺して湖面に投

もつとも
していく。ちなみに健吾と冬美のペアは釣りをほったらかして氷上遊びに夢中だ。

南国育ちの健吾はしよつちゆう転んで、冬美に助け起こして貰っていたのだが。

それを苦笑いしながら見る美波とさやかが揚げ物と焼き物の用意をして皆の獲物を待つ。

「ほい釣れた。」

最初に釣つたのは恵那だ。しかも針を外して再投入したすぐに2匹目をゲットする。

隣で釣っている黒岩が「さすが器用たいねー。」と感心している。まあ黒岩の釣果が芳しく

ないのは寒さのあまり釣りに集中できていないのもあるが。

大野は真剣そのものの目で竿先を凝視している。念願のワカサギ釣り、しかもなでしこちゃんに

無理を言つて氷上釣りに来たのだからなんとしても釣果を上げなければ！

そんなガチの彼女になでしこは「真ちゃん、リラックスリラックス」とたしなめる。同い年で

高いフィジカルを持つ両者だが、こと釣りに関しての楽しみ方は案外真逆だったりする。

だからこそいいコンビではあるのだが。

「アタってるよ志摩さん。」

「え……マジで?」

しずくのアドバイスを受けてリンが小さな竿をがしつ、と握る。繊細なワカサギのあたりは

竿先のわずかなしなりで判断するしかない、何度かの小さなシャクリの果てに乗った魚を

引き上げ、よし!とガッツポーズを見せるリン。しずくはお見事!と小さく拍手、元々

釣り船屋で働いていた彼女は自分で釣るより、同伴者が釣果を上げる方が何か幸せな気分になれる。

「よし、じゃあ次はあっちだ!」

「またー?もうここでええやん、釣れんでも。」

夏美はここでもポイント^{ラン}移動^ガ釣り^ン絶好調だ。湖面を穴だらけにしてアタリが無いと判断するや

ポイントを変えまくっていく……そのうち怒られるでコレ。

で、一番苦戦しているのが陽渚だ。とにかく虫エサが付けられないんじや話にならない、

変顔涙目でエサに手を伸ばしては引つ込める陽渚を見て千明はメガネをくいと上げ、

その様を

スマホのカメラに収めていく、頑張れ鶴木嬢！

「つて写真撮ってないで、大垣さんも釣ってよ〜。」

「釣ってるぞ〜、ほい3匹目。」

スマホ片手に難なくワカサギを釣り上げる千明。この釣りに相性がいいのかはたま

た
ビギナーズラックか、いいペースでワカサギをゲットしていく。

2時間の氷上バトルを経て、結果発表。

「一位、お子様コンビー！」

「おっしやあー！」

「やったねケンちゃん。」

なんと一位は健吾&冬美コンビだ。氷遊びに飽きて釣りを始めた途端アタリまくり

！ポイントも

良かったのだろうが、子供の小さな手にはワカサギの繊細なアタリを敏感にキャッチ
できたのかも

知れない。

以下、黒岩&恵那組、しずく&リン組、大垣&陽渚組（陽渚はボウズ）、大野&なでし

こ組、

最下位に夏海&あおいチームと相成った。なんとお子様チームを除けば10年前とほぼ真逆の結果となった。

で、その後は繁松と肇も交えてのワカサギパーティーとなった。大きき別に揚げ物と串焼きに

調理して皆で舌鼓を打つ。寒さで冷えた体にアツアツのワカサギが口に幸せな熱と味を

与えてくれる・・・ワカサギ釣り最高!

量的にはささやかなものだが、なにぶん朝食が鍋^{アツ}だったためにみんなそんなには入らない。なのでワカサギの小さな魚体でも満足する事が出来た・・・なでしこを除いてだが。

食事を終え、後片付けをして車を荷物に積み込む。それは、この楽しい旅の終わりを告げる時。

「では、キャンプ場に戻りましょう。」

美波の言葉で各々が車に乗り込む、横目で「彼女」を見て、意識しながら。

健吾の腕にぎゅっ!としがみ付いて、泣きそうな表情の大町冬美の姿をチラ見して、

全員が同じ

感想を心で漏らす

(やっぱり・・・こうなるよなあ。)

第18話 となりのとなり

「ふいふ、ようやく着いたわあ。」

「・・・そう、ですね。」

白樺湖から車で約二時間、ようやく松ぼっくりキャンプ場に帰還したあおいの言葉に夏海がやや寂し気に、それでも笑顔で頷く。

芦方勢の山梨遠征もいよいよ終わり、ここで一息ついた後に長い長い帰り道の途に就く。

そう、ついにお別れの時間が来てしまったのだ。

「色々と楽しかったですよ、また夏にお会いしましょう、帆高さん。」

美波の言葉に、あいよーと返す夏海。現役の教師3人が乗った車内でいろいろと為になる話を

交わす事が出来た、半年後の再会を先の楽しみにキープして。

続いて到着した恵那の車から黒岩としくが降りた後、うーんと体を伸ばす。

「斉藤さん、いろいろお世話になりました。」

「またよかったら芦方に来るとよかぞ、待つとるけんね。」

年上の女性二人に礼を言われ、さすがの恵那も恐縮気味だ。誰かをさらつと手玉に取るのが

得意な恵那だが、この二人はそんな自分の思惑をあつさり受け流してくれる。それだけに

仲間内には無いやりとりがなんとも新鮮であった。

少し間を開けて千明の車も到着する、乗っていたのはリンとさやか。そして移動中ずっと

神妙な顔をしていた健吾と、その腕にすがり付いてしゃくり上げ続けている冬美。

移動中リン達はずつとなだめ続けていたが、それでも二人の子供は間もなく訪れる別れに

悲しさを隠せなかった。

大町冬美と小谷健吾。遙か遠くの地にいた7歳の少年少女はこの地で出会い、かけがえない

友達となった。出会いと同じ時間を過ごし積み重ねて来た楽しい思い出は、そのまま別れの

悲しさへと置き換わるのだ。

「ほら、健吾！早く降りなさい。」

さやかなの強い口調にも健吾は下を向いて無言で反抗する。冬美の腕にすがり付いて泣く

姿を見て、彼もまた「別れたくない」という意志を共感してしまっていたのだ。車の中で何度も

「あと一日でいいから居つとつたい」とワガママを言っていた。

(さよならだけが人生、か。)

その様を見て千明は思わず心で嘆く。普段から引つ込み思案で友達を作るのが苦手な冬美にとって

健吾は本当に宝物のような友人だっただろう……。せめてもの救いはまだ二人が男と女の認識が

ないことだろう。もしこれが初恋になっていたらいよいよ別れが悲劇になる所だった。

「しっかし、なでしこの奴遅いなあ。」

気分を入れ替えようとそう嘆く千明。なでしこの車とは途中のチェーン脱着所での処置の

遅れから未だ到着していない。まあ遅ければ遅い程、あの二人が一緒にいる時間は引き延ばせる

のだが……。

と、駐車場になでしこの車が到着する、いよいよその時が来たかと一同が心の準備をする。

が、後部座席から出て来た陽渚を見た瞬間、一同がうわ！という顔をする。

「うう〜、な、なんとか、間に合った……うぶ！」

目の下にクマを作り、青い顔で口を押える陽渚。明らかに車酔いしているのを見て一同が

駆け寄り、大丈夫かと背中をさする。

「あ、ありがと〜。で、健吾君と冬美ちゃんは？」

青い顔のまま千明にそう問う陽渚。未だ千明の車の中にいる事を聞くと、ふっふっふと

笑いながら車に近づいていく……見た目が不気味で怖いんですけど。

その様を一同は不思議そうに見るが、陽渚と車内で一緒だったなでしこと大野はふっふっ、と

笑顔を見せて先の展開を見守る。

「健吾君〜、冬美ちゃん〜、いーモノあげるね〜。」

その言葉にうつむいていた二人が「えっ？」と顔を上げる。陽渚が二人の目の前にか

ざしたのとは

小さなひもで吊るしたふたつのフェルト製ストラップ。それを見た二人は、いじけていた顔を

まるで花が咲くようにはあーっ!と明るくさせる。

色黒の男の子の、にかつと笑う顔と、色白で長い黒髪のはにかんだ笑顔がぴつたりホツペで

くつついた二人そのままの顔――

「うわー!よう出来とつとー、すごかばい!」

「すつごーい、ケンちゃんそっくりー。」

渡されたストラップを手にとって目をキラキラさせる子供たち。先程までのイジケ顔は

どこへやら、すっかり笑顔になっていた。そう、お別れの時に心の慰めになるもの、それは

「思い出の品」。

仲睦まじいふたつの顔は、これから別れる二人の縁を繋いでいるような気持ちにさせてくれる。

わらわらと集まる面々。そのストラップを目にした一同は、まず揺れる車内でそれを

作り上げた

陽渚の執念にまず驚き、その後に自分たちが10年前に受け取ったソレを思い出す。「ふっふっふ、それを持つてるとね、また絶対会えるんだよ。」

陽渚の言葉に、きよんとした目を向ける健吾と冬美。だが少し間をおいて二人はそれが

ただの慰めでしかないと気が付く。そんなわけない・・・

「健吾、周りをよく見なさい。」

「ほら冬美、顔を上げて。」

二人の母親が、優しい声で我が子を促す。応えて顔を上げる少年と少女は、車を取り囲む

その光景に、思わず目を見開いて固まる！

「にっひっひっ」

「どやあ！」

「ほれほれ。」

「私たちも持つてるよ」

大人たち全員が車を囲んで、ふたつの顔が並んだストラップを手から下げて見せている、

それは10年前、芦方にて出会った仲間たちの記念にと皆に配ったふたつの顔のストラップ。

時を経てかなりくたびれてはいるものの、全員がそのときの記念の品を持ってきていたのだ。

あの懐かしい仲間の事を思い出させてくれる、その再会の約束の品を。

「鶴木さんの言ったことは本当よ、こうして私たちも再会できたんだし。」

さやかがグビ姉とビールバカの顔のストラップをひらひらさせてそう論ず。缶ビールと

カップ酒で乾杯するその絵に（・・・お母さんつてば）と苦笑いする少年少女。

「だから、ね。今日はお別れ。」

美波の言葉に、健吾も冬美もストラップを胸に抱いたままこくりと頷く。そう、また会えるなら

それを楽しみにすれば笑ってお別れできるものだ。車から降り、全員が輪になって集合する。

と、なでしこがびくん！と反応し、大野が「あ！」と声を上げる。彼女たちが反応したのは

この松ぼっくりキャンプ場に小音量で流されているラジオの放送だ。

「みんな、ラジオ聞いて！」

なでしこの言葉に、全員が耳に手を当ててラジオに聞き入る。

—それでは最後の一曲、東京都の“まるしこ”さんからのリクエスト、“となりのとなり”—

実はなでしこは運転中、大野に頼んで地元のラジオ局にこの曲をリクエストしていたのだ。

お別れを悲しむ冬美たちにせめてこの曲をと、わざわざ到着時間にタイミングを合わせて。

それはかつて芦方から帰る時に別れを惜しんで涙した、なでしこだからこそその氣遣い。

あの時に黒岩から、ていぼう部から『歌』を送られ、それで笑って別れられた記憶の再現。

—君は今どうしてますか、どんな景色を眺めてますか—

—私の事を覚えていますか、出会った時のことを—

その曲は数年前のアニメのエンディングテーマ。月から地球に来た青年と恋に落ちた姫が、

世界の様々な景色を彼と楽しんで、彼が月に帰った後に想いを歌った曲。

「たーのしい時間を過ごーしたね、思い出しーっぱい作ーったね♪」

「キレイなー景色にーかつこまつれて、ふたりで世界を感じたあの時♪」

即座に反応してみんなが歌う。そう、あの芦方の夏のように。

「今はもう、君は遠くに・・・だけどね♪」

健吾と冬美も合唱に参加する。この後の歌詞を知っていたから、尚更に。

「空をみあーげるー、あの日見たーゆうやけーをー、あの向こうにー君はいるー♪」

「そう、わーたしーのとなりには、そらがある、そらのとなりには、きーみーがーいるー

♪」

いつかまたきつと会える、会いに行く。その決意を全員が胸に刻んで、歌う。

ーとなりの、となりに、きみがいるー

ーだから、いつか会いに行くよ、翼を広げてー

赤富士が見下ろす1月1日の松ぼっくりキャンプ場、夕焼けに染まるその場所で、彼

と彼女は

再会を歌にして誓った。

第19話 ビバーク新年号

「お！志摩さん早いねえ、おはよー。」

「おはようございます刈谷さん、あけましておめでとうございます、今年もよろしく願いします。」

「はい、おめでとさん。」

1月4日、名古屋のしやちほこ出版も本日から新年の業務がスタートだ。とはいえ元旦から

取材に走っていたリンにとって、今日が仕事始めの認識はあまりない。早朝から記事

を
まとめていた彼女に勤勉さに感心しつつ、先輩の刈谷は席に着きながらふう、と一息つく。

「そーいやキャンプ場の取材、あの木村氏と一緒にだったんだった？」

「ええ、とても勉強になりました・・・ってもう写真来てるし！」

パソコンを操作しながら返事したリンがメールボックスを開くと、いきなりビバークの

木村氏から大き目の添付ファイルの付いたメールが送られていた。

早速解凍ソフトでファイルを開けると、まああるわあるわ大量の写真が・・・年末年始に

取材に行った松ぼっくりキャンプ場の数々の情景からフォトコンテストの各人、そして

うまそうなキャンプ飯の大量の画像に思わず見入る二人。

しかし流石と言えはさすが木村氏だ。その構図の取り方もそうだが、逆光をうまく使つての

シルエットを強調したのもあれば、フラッシュや光量をうまく調整して表情をうまく浮かばせた

一枚もある、その鮮明さがよりそのイベントの楽しさを浮かび上がらせていた。

「ほお、楽しそうだねえ、俺も一度行ってみようかな。」

「いいと思います、というか会社の慰安旅行でどうですか？楽しいですよ。」

リンの返しにそりゃいいね、と笑う刈谷。彼を含むリン以外の社員はあまりアウトドアに

明るいわけでは無い、ならば彼女を幹事にしてのキャンプ旅行などやってみたら面白そうだ。

写真を吟味するリンは、その何枚かに赤いチェックマークが入っている写真を見つけてる。

何だろうとメールの本文を確認すると、案の定木村氏の注釈が入っていた。

『赤チェック入れている画像はこつちで使う予定でーす。』

なるほど、この企画はビバークとしやちほこさんぽの同時企画だ。そこに載っている写真が

同じものばかりでは面白味が無い。なのでなるべく違う写真を使った方が良いでしょう? という

木村氏の気遣いなのだろう。

「さすが一流のライターだな、こちらに先に手の内を明かすとは余裕じゃないか。」

リンの後ろで覗きながら刈谷がそうこぼす。その言葉の裏にある意図は、今までの彼女には

通じなかったのだが・・・今日の、いや今年の彼女は違っていた。

「じゃあこちらは違う方法から攻めてみます!」

午前10時から始まった新年仕事始めの会議。一通りのあいさつやお土産の交換が終わった

和やかな会議室にて、リンは資料を机に置いて編集長に提案する。

「このダイヤモンド富士の記事、こちらはとことんぶっ飛んだ方向で行きたいです！」

その言葉に全員がざわつ、とした感情を覚える。あの真面目な記事を書く志摩さんからの

提案とは思えないその言葉面と、なにより今までの彼女には無かった気迫めいたその表情に。

「ビパークさんがどういう記事を書くかは、使用する写真を見ればだいたい予想がつかず。

ならこちらは全く違う方向性で攻めてみたいんです。」

リンは覚醒していた、というのは大袈裟なのだが、確かにこの年末年始に経験した雑誌記者との

邂逅、黒岩悠希の自由な発想と木村氏の大らかなスタイルに触れ、明らかな意識改革があった。

良い子ちゃんて記事を書いても面白い物にはならない、だったらもつともつと自分を出して

記事を、雑誌をわたし色に染めていくつもりでやってみたい！と。

むろん迷いもある。地域ローカル雑誌ならいくらかは優等生的な記事が求められる

ものだ。

そこにライターの個性をぶち込むのはかなりのギャンブルといえる、うまくハマればいいが

失敗すればただでさえ数少ない読者にそっぽを向かれる可能性すらあるのだ。

しばしの沈黙の後、まず編集長が、そして会議室の全員が思わず笑いだす。

「え、え？ええーっ！なんで笑われるの?！」

「いやー、志摩さんが取材に行っている時に一度会議したんだけど、その時に全く同じ話が出てね。」

「どうも志摩さんの記事は個性がないな、って話してたんだよ。」

編集長に続いて刈谷がニヤニヤしながらそう答える。彼らが思っていたライター、志摩リンへの

期待が、年が明けた途端に実現したんだからそりや笑うしかないだろう。

「やってみたまえ、いい記事を期待しているよ！」



1月15日、熊^{熊本}元県芦方町にある喫茶店「ほだか」にて、元ていぼう部のOG達がひ

とつの

テーブルに集まって、紙袋に包まれたふたつの雑誌に注目している。

「んじや開けるぞく、まずはビバークさんからたい。」

あの山梨、高下町のキャンプ場の特集が組まれたビバークとしやちほこさんぽの最新号。実は

どちらも発売日はまだ少し先なのだが、みんなが集まれるこの日に合わせて黒岩が雑誌のコネを

利用して先行入手していたのだ。

各々が工夫を凝らしたフォトコンテストや、山梨の友人たちとの10年ぶりの邂逅がどんな記事に

なっているのと興味は尽きない、皆かぶりつくように封を切られ取り出される雑誌に

注目……

「ぶーーーーっ!!!」

全員が一斉に噴き出す。なんと彼女らの恩師であるさやか^{ビールバカ}がダイヤモンド富士をバックに

豪快にジョッキをあおっている姿がデカデカと表紙を飾っているのだから。

「なんでさやかちゃんが一!?」

「なんかもう・・・ラブ・ビールって言葉がピッタリだなー。」

「でもすごくいい絵です、コマージュルとかに使えそう。」

呆れる陽渚と夏海に続いて、大野が絵面の良さに感じ入る。確かにビール好きの酔っ払い先生の

印象を別にすればいい絵ではある、雄大な富士山と輝く朝日に負けない凶々しい存在感が、

ある意味見事な一体感を醸し出している。

ちなみにしずくは腹を抱えてコロコロと笑い、さやか本人は腕組みして胸を張り「当然でしょ!」

と鼻息を荒げてのドヤ顔・・・ああこれはまた今夜は爆飲みだなあ。

特集ページはセンターカラーだった。元々アウトドア用品の広告が多いこの雑誌に在っては

事実上トップページと言って良い。

「さーて、フォトコンの結果は・・・やっぱさやかちゃんか。」

一番上の賞はダイヤモンド富士にあやかかってダイヤモンド賞と名付けられている。

以下金賞一枚、銀賞と銅賞が2枚づつ掲載されていた。

「美波^グ先生^姉が金賞か、てつきりコレがトップかと思つたけどねー。」

「お！健吾と冬美ちゃんも銀賞じゃない。んっふっふっ、これは報告が楽しみね。」

「つて、ひえええ、わたしちよつと変顔になつてる〜」

陽渚が自分の写真を見てちよつと困惑している、いかんせんアップで映り過ぎたせいかちよつと

微妙な表情の崩れが見られる。

「にやつはっは、陽渚は相変わらず写真写り悪いな〜。」

笑う夏海に「でも銀賞だもーん」と開き直つて返す陽渚。まあこの一枚はカクテルの逆さ富士に

アングルを合わせた故の評価も大きいだろうが。

「大垣さんと犬山さんもいい絵です・・・。」

「あおいちゃん綺麗だからなく、あれでまだ独身つて不思議だよ。」

「大垣さん寒さでめつちや震えてたよねー、バーテン服のまま撮つてたから無理もないけど。」

写真を吟味した後、キャンプの記事に目を通す一同。そこに書かれていたのは、かつて

アウトドアの部活をしていた女子達の10年ぶりの邂逅、自分たちでキャンプ場を作りあげた

野クルと、この日の為に大量の振る舞い海産物を自ら釣り上げて持ち込んだ遠い南国の

ていぼう部のOG達の物語。

「なんか、こう・・・照れるね。」

「あたしは慣れとるけどね。」

「よし、これで来年のていぼう部、新入部員殺到間違いなし！」

「ウチの漁業組合の名前も出てる・・・景気が良くなるといいね・・・って、真ちゃん？」

最後に感想を述べたしずくが、後ろで顔を押しさえて赤面している大野の態度に不思議がる。

雑誌に目を戻すと、ページ半分を使って大野の写真と、彼女が語った「海なし県と海洋汚染の関係」の記事が丸々載っていた・・・まさかここまで大きく取り上げられるとは。

「んじゃビパーク撤回、発売日までネタバレ厳禁たい。」

そう言って雑誌を袋に戻す黒岩。今時のネット社会ではこういう発売前の記事を垂れ流す困った

輩もいるのだ。あくまで今日は身内で見せるだけである。

「じゃあ次は志摩さんの雑誌だね、しやちほこさんぽ、だっけ？」

「うむ、こつちも楽しみたい。あたしや大野、ゆら先輩の画像あつとかな〜？」

そう言いつつもう一冊の封を開け、雑誌を取り出す黒岩。そこにあつたのは・・・

第20話　しやちほこさんぽ1月号

「ぐふっ、ぐふふふふふふ……」

東京。雑誌「ビバーク」編集部で雑誌を読みながら不気味な笑いをこぼしているのは

人気アウトドアライターの木村氏だ。手にしているのは名古屋から送られてきた発売前の雑誌

“しやちほこさんぽ”の最新号。

「お！例の山梨の記事、あちらさんも出来たのか。どんな塩梅だい？」

編集者の高尾が興味津々で食いついてくる、木村とは長い付き合いなので彼がこういう

笑い方をする時はご満悦なのをよく分かっている。

が、木村は高尾に明白に答えを返すでもなく、天井を見上げてひとり呟く。

「……いやあ、化けましたなあ、志摩さん。」



芦方町、喫茶店ほか店内。ビバーク最新号の閲覧を終え、次にしゃちほこさんぼの新年号を

取り出したていぼう部OGは、その攻めた表紙に思わず「おー！」と息を漏らす。

何と表紙を飾っているのは松ぼっくりのアップだ。ダイヤモンド富士にかざされたそれは

朝日に、富士山に、そして読者に、アケマシテオメデトウ／と新年の挨拶をしていた。

「なんか和むねー。」

「松ぼっくりが喋っているのがいいよなー、あたしも昔フナムシが喋ってるの想像したし。」

夏海の想像に思わずひいつと身を縮める陽渚、というかそんなこと考えてたの……付
けエサに

してたクセに。

山梨高下キャンプのページを開くが、どこにもフォトコンテストの文字が無い。代わ
りに

誌面頭にあったのは“しまりんのアウトドアレポート”という表題だ。どうやらコ

ンテストの

ほうはビバークに丸投げして独自の企画を打ち出してきたようだ。

「しまりん・・・志摩さん本名で勝負してます。」

「ほーう、思い切ったたいねえ。」

黒岩がリンのまさかの「自分出し」に感心しつつページをめくり、先にある記事を眺めて・・・。

「あははははは！あたしジンジャー君で載ってる！」

「ゆらさんへビ酒アツプ・・・写真でもコワイ。」

記事は年末年始のキャンプ進行をリポートしながら写真を挟む体を取っている。で、その

肝心の写真だが、明らかにウケを狙ったものが多数あった。夏海のカツラをかぶった

ジンジャー君や、ゆらさんがとっ捕まえたへビ酒などインパクトのある絵面が並ぶ。

そして・・・

「ほぼ全部の画像に志摩さんのツッコミ入ってます・・・」

大野がクスリと笑って言う通り、画像の隅にはSNSチャットのような志摩さんのアイコンで

写真に注釈やコメントが語られていた。黒岩＋斉藤さんはすっかり妖怪扱いだし、犬

山あかりちゃんの

マティーニにうへえする一枚は某アニメ会社のアングルを挿入されていて、土岐綾乃さんは

人型シユラフで撮影したのをいいことに富士山登山者のごとく画像合成されて掲載されていた。

「お！赤井店長と志摩さんのお爺さんのツーショットまで。ワカサギ美味かったな！」

「でも、これ大丈夫なのかな・・・。」

陽渚が心配そうにそうこぼす。彼女の写真こそ無いがこの記事自体が志摩さん劇場というか

完全に彼女の日記帳と化している気さえする。よく言えば個性的だが、悪く言う雑誌の

私物化とも取られかねない記事だ。

その陽渚の言葉に、黒岩はふふん！と鼻息を鳴らして返す。

「心配いらんて、そもそも問題なら校正の段階でひっかかっとなるはずやつけんね。」

その返答にそれもそうか、と納得する一同。そこに黒岩はもう一言お褒めの言葉を付け足す。

「志摩さんも」記事を書く」から」誌面を作る」にランクアップしたみたいやね。」

そんな意見に一同は「さすがプロ」と感心する。まあ黒岩は自分好みの記事しか書けない

ライターだけに、優等生的な記事が求められる大手にはあまり縁が無かった。その代わり

個性的な切り口から記事にして行つて、見る人が見たら「あ、コレ書いてるの黒岩さんだ」

と分かつてしまう程、雑誌を自分色に染める傾向があつた。

今まではやや優等生的な記事を書いていた志摩さんも、この記事はいかにも彼女らしい

感性とエッセンスが注がれた個性的な記事になっている、チャット風のツツコミがいかにも

若者向けなものも好感が持てるポイントだ。

「お！次は料理特集……って大野先輩!?!」

「……なんですか、このポーズ?」

キャンプ飯のアタマを飾っているのは調理担当の大野と各務原なでしこが調理場の前で

並んで映っていた。それはいいのだが問題は二人がまるでどこかのファンタジー
ニメの

必殺技のようなポーズを取っていたことだ、オタマや綿棒を武器代わりにして・・・
「ゆ・・・雪合戦の後、志摩さんに呼ばれて、そのポーズしてって言われただけで／＼／」

彼女らは知らない。あのキャンプでリンは雪合戦をキツカケに、記事の書き方を10
0%

方向転換してきたのだ。ただつらつら出来事だけを書いて面白くはない、ならば多
少の
演 出を盛つてでも、自分のアイディアを生かそうと。
フィクション

この年末年始のキャンプ旅行で、个性的なライターライターの黒岩や大手の売れっ子木村との
出合いは、

彼女に大きな意識改革を促していたのだ。

このポーズも雪合戦の後、リンが大野となでしこを引っ張って来て、調理道具をわざ
わざ

元に戻してまでして撮影したものだ。もともとオドオドしていた大野に対してなで
しこは

ノリノリで必殺技ポーズを決めていたのだが。

「写真とツツコミは容赦ないけど記事はしっかり書いてるわね、使い分けが上手。」

さやかが文章に目を走らせてそう感心する。確かに写真も文章もしっかりかめつちやかでは

記事としての体を成さないだろう、インパクトのオンとオフを使い分けたその雑誌のコーナーは

誰が見ても間違いないく、「面白い」と言える出来であるだろう。

「これ、今頃ビバークさん真っ青になつとるかもね。」

雑誌を読み比べた結果、面白さという一点なら明らかにしゃちほこさんぽ側に軍配が上がりそうだ。地域ローカル誌が有名雑誌を食いかねない特集記事に思わず苦笑いを

こぼす黒岩。

まあ、当のビバークではちょうど木村が記事を見て不気味に笑っているのだが。



「うはははは！はっちゃけすぎだろリン!!」

山梨県富士川町のキャンプ場で、発売された“しゃちほこさんぼ”を見て大笑いする千明。

同席しているなでしことあおいも、その思い切った記事に思わず笑みがこぼれる。

「あの真面目な志摩さんがなあ・・・」

「リンちゃんはできる子だと知ってましたっ！」

感心するあおいに続いて、なでしこが胸を張って鼻息を鳴らしながらドヤ顔する。久々に

集結した“野クル生徒のみメンバー”の3人がページをめくっては騒がしいリアクシオンで

友人の書いた記事を絶賛し続ける。

その管理棟の壁に張り付いて聞き耳を立てていた女性、志摩リンは安堵の表情でずると

崩れ落ちる。

（ウケたー、少なくともあいつらには・・・よかったああああ。）

はつちやけた記事を書き、校正をあつさりクリアして、いざ雑誌になった段階でリンは

めつちやくちやネガティブになっていたのだ。もしかして自分とはとてつもなく痛々

しい記事を

書いてしまったのではないか？社に苦情は来ないのか？今後このノリで仕事しているのか・・・？

いてもたつてもいられなくなった彼女は、「仕事で来られない」と言つたはずの今日の寄り合いに無理に駆け付けて、友人たちの正直な感想を聞くべく壁に張り付いて聞き耳を

立てていたので。

「良かったねー、面白いつて言つてもらつて。」

「うおっ！斉藤、い、いつからいたんだ。」

突如目の前に現れた恵那に恵那に思わず声が出る、相変わらず神出鬼没な女だぜ。

「お！なんだリンに恵那、結局来たのか、入れ入れ！」

「リンちゃん、この記事すつごく面白いよ！」

「なんか本格的に皮むけた感じやなあ。」

管理棟からわらわらと湧いて出た友人たちに連行されて、手荒い歓迎を受けるリン。かつては騒々しいと苦手だった野クルのバカ騒ぎは今、リンにとって胸に染みるほどに

温かく、そして有り難かった。

そんな様をイスに座ったままで眺める大町^グ美波^姉。彼女は教え子の成長を喜びながら

も
心の中でこう呟いた。

(今後からが大変ねえ、志摩さん今回のクオリティが最低基準になるの、分かってるかしら?)

最終話 本栖高校野外活動サークルと海野高校ていぼう部

ピー

軽めの電子音と共に高速バスの降り口が開く。そろそろと下車する客に混ざって、一人の

少年がチケットの半券を運転手に渡し、会釈してその地に降り立つ。

「うっわ、やっぱ寒かばい……」

浅黒く日焼けした顔に短いスポーツ刈りの髪型と、決して長身ではないけど引き締まった

体をしたその少年が4月の寒さに縮こまるその姿は、いかにも温かい地方からやってきた

南国少年だという印象を与えている。

ここは山梨県富士川町高下。道の駅、*「ダイヤモンド富士」*。

「このへんも変わったなー……昔は細っそい一本道しかなかったとに。」

はじめてこの地に来たあの10年前、ここは山際のややさびれつつある田舎町という

印象だった。

しかし今は幹線道路が山を抜け、まだ新しい道の駅が地元の野菜や土産を販売し、軒先には

軽食やスイーツの露店が軒を連ねる。そして土曜日の昼らしく大勢の観光客やドライブ休憩の

ファミリィでごった返していた。

「とりあえずさしよりチエックインするばい。ここから下に500m、か。」

その看板を見てそう呟いた少年は、駐車場の切れ目から下に続く木造りの階段を降りながら

遙か遠方の霊峰富士を仰ぎ見て、そこから下方に視線を落とす。

眼下に映るはキャンプサイト“富士川松ぼっくりキャンプ場”。

◇

◇

◇

「はい、記入終わりました。」

「今日から一泊なのな、珍しいじゃんこんな時期に。」

キャンプ場の管理棟、眼鏡をかけた30過ぎに見える受付女性に書類を出しているのは

1人の少女。黒髪をポニーテールにまとめ、すらりとした細身ながら出る所はしつか

り出ている、

凜とした雰囲気を纏ったその娘、大町冬美は笑顔で管理人の女性、岡崎千明に渋い笑顔で返す。

「ま、まあたまにはソロもいいかな、つて・・・」

目線を泳がせ曖昧な返事をする冬美に、千明は眼鏡を光らせてニヤリと疑惑の笑みをこぼす。

これは何か隠しているな、と。

一方の冬美は冷や汗をかきながらも笑顔を崩さない、ただ心の中では（あっちゃー）と嘆いているのだ。よりによって今日の担当が千明さんとは・・・いい人ではあるんだが、どうにも

下世話な絡みをすることが多い、今回のキャンプに同伴する相手を知られたら絶対に冷やかされること間違いない。

「じゃ、じゃあ早速設営してこよっかな・・・」

なるべく距離を置こうと、そそくさと出口の方に移動する冬美、ドアノブに手を掛けて・・・

—ガラッ！—

力を入れる前に、ドアが勢いよく開いた。

「ひゃあああつ！け、健ちゃん!？」

「おお！冬美、もう来とったとか。」

びつくりした猫のように飛び上がって驚く冬美の前にいたのは、はるか遠方の愛しの君、

小谷健吾その人であった。

「やつぱりかー、そんなこつたるうと思つたけどな。健吾君おーつす!」

「ご無沙汰してます、千明さん。」

ニヤニヤしながらそう話す千明に健吾は綺麗な姿勢で会釈する。体育会系のイメージが

ある彼だけにそういう動作も気取つた印象が無く、他意のない礼儀正しさを感じさせる。

一方冬美は照れながら頭を抱えていた。千明さんにはバレるわ、取り乱した自分を健吾に見られるわでもう最悪である、なんとか話題を反らさないと・・・

「そ、そうだ健ちゃん、頼んでたアレ持つてきてくれた?」

「ん? ああ。ちゃんと持つてきたばい、おれらで釣つた魚の干物やる?」

そう言つて荷物からビニールを取り出す健吾。中には天日でじっくり乾燥させた地元熊本の元熊元の

地魚の干物が多数入っていた。

「わーい、おっさかなっ、おっさかなっ♪」

干物袋を掲げてわざとらしく飛び跳ねる冬美。だが多少棒読みなせいで演技なのがバレバレだ。

きつしつしと笑う千明の横で、健吾は（お前なあ）という顔で呆れている。

観念した冬美を含む3人で管理棟のテーブルを囲み、設営前のティータイムとなった。

「しかし、ほんとこのへん変わりましたね、にぎやかになったっていうか、活気あるばい。」

「だろー？結構頑張ったんだぜ、あたしらも。」

山梨県観光推進機構に所属していた千明は、この高下地区の発展のまさに中心人物と
いっていい

存在だった。そのきっかけとなったのが10年前のキャンプ場設立と、その年明けに
企画された

雑誌社主催のフォトコンテストだったのだ。

—遠方のアウトドアクラブの女学生同士、美しいダイヤモンド富士を背景に10年越
しの交流—

その記事と写真は大きな話題となり、多くのアウトドア愛好家がこの高下の地に関心を

寄せたのだ。千明たちはそれを町おこしに大いに活用すべく各方面に働きかけをし、また

地元の人たちへの根回しに奔走して町の発展に大いに尽くした。

富士川町と熊元^{熊本}県芦方町は姉妹都市となり、両県の交流がさかんに行われた。

その結果、まるで違うカラーを持つ双方が影響し合って、より魅力ある街づくりを後押ししてきたのだ。

道路を通し、土産物屋や観光地を整備し、新たに温泉も掘り当てて企業誘致した。そして昨年

ついに大きな道の駅が完成し、高下一番の名物“ダイヤモンド富士”の名が冠されたことで

押しも押されぬ観光地としての地位を確立したのだ。

ちなみに千明は地元で親しかった農家の岡崎氏のお孫さん（7歳年下）と結婚していた。

彼女のそんな地域密着型の行動力も開発に際し、地元の理解を得るのに一役買ったのだ。

結婚後は観光推進機構を退職し、その退職金でふもとの町に居酒屋“ぐびねえ”を開店、

夜は店のママさんとして客のテンションを上げまくっている。ついでに昼間は暇なので、

こうして時々キャンプ場の受付のバイトをしているという訳だ。

「ふたりも大人になったら飲みに来いよ、楽しいぞー。」

「ええ、母も連れて来るばい。」

「ウチのお母さんはすっかり常連だけどねー。」

ちなみに居酒屋ぐびねえを立ち上げるにあたり、千明の恩師である大町美波と遠方の友人

鶴木陽渚（旧姓）は大いに協力してくれた。特に陽渚は店のレイアウトから出すカクテルの

チョイスまで、そのデザインセンスを大いに生かしてコーディネートし、店名の通り女性客が

気兼ねなく楽しめる店として有名になっていたのだ。

「で、どうだ今年の野クラは？」

健吾の問いに、冬美はあははと頭をかいて、ちよつと困った顔で返した。

「それが・・・新入部員足りなくて、また野^ノク^ルに戻っちゃって。」

「あーら。まあ去年は3年が5人もいたかんね、部費も減るんやろ？大変やな部長。」

現在冬美が部長を務める本栖高校、野外活動サークルはいつも人数が部活認定できる

4人前後のギリギリで、人数が足りている時は野外活動クラブ（通称「野クラ」）、

足りない時は発足当時の野外活動サークル（通称「野クル」）という名称になっていた。

「そっちはどうなの？ていぼう部の部長さん。」

「ああ、こっちは3人入ってくれたんで今年も問題無したい。」

「内訳は？男女の。」

「3年は俺、2年は冬美も去年会った松茂さん、1年は男子1人に女子が2人ばい。」

「冬美ちゃん、浮気が心配かね？」

千明のツツコミにうぐ、とうめいて頬を膨らませる冬美。去年芦方で会った松茂さん

も

結構可愛かったし、あと新入生にも女子が2人居るとなれば気にはなる。

「そんなことせんで、俺は冬美一筋やって。」

「ちよ／＼／このバカ！何口走ってんのよ!!」

ごく当たり前のようにそう発する健吾に、冬美が鼻まで真っ赤になってあたふたして、

しまいに（もう、バカ！）と健吾を突き飛ばす。

ふたりが出会った10年前から、本栖高校野外活動サークルと海野高校ていぼう部の交流は

続いてきた。夏休みには一年ごとに一方がもう一方の土地へと旅行合宿を実地し、世代ごとの

生徒たちの交流を重ねて行った。健吾も冬美も高校生になったら自分たちも、この思いを叶えて

2年前に再会を果たす。そして今年はずいにお互い部長になったのだ。

10年前のあの日、初めて会った二人はごく自然に友達になった。まだ7歳の二人に恋愛感情が

芽生えるはずは無かったのだが、その思い出だけはふたりの心にしっかりと残っていた。

それを繋いでいたのはあの日陽渚さんに貰った、ふたりの顔が頬をくっつけ合っていたストラップ。

やがて男女を意識する年齢になるとそのストラップの顔がぴったりくっついていて様になら

心が動き、思いが募った。再会を約束する思いはいつしか「恋心」という色を一筆追

加していた。

そして2年前、新1年生部員として再会したふたりは思い出の中より遥かにいい男に、いい女に

なっていた想い人に思わず感激した。それは“美しい思い出”という絶対的な存在を凌駕する

ふたりの成長、そして魅力。そう、いわば“人間力”に感動し、ふたりは自然に恋仲となった。

・・・まあ見詰め合って涙を浮かべる二人に、同伴していた先輩たちがドン引きしていたのは

このさい置いておこう。

「ごちそうさまでした。じゃ、設営行くつか。」

湯呑を置いてそう言う健吾に、冬美も続いて立ち上がり、荷物をしよい込む。

「うん、今回はどの辺にする、また一番上？」

「じゃっばい。」

連れ立って管理棟を後にしようとする二人の背中に千明が一言。

「不純異性行為は禁止だぞー、ちゃんと別々のテントで寝るよー。」

「しませんっ！」

「当然たい!!」

ぐるん!と振り向いてそう叫ぶ二人。さすがに健吾の顔も真っ赤だ。

「ま、二人には前科があるからなく、ほれほくれ。」

千明がタブレットで二人にかざして見せたのは、封筒型シユラフに寄り添って寝ている。

あの幼い日の二人の姿だった。

「なんて写真撮ってるんですかーっ!!」

真っ赤になって千明を追い回す冬美。それを見ながら健吾は「帰るまでに千明さんにその

データ貰おう」と心に誓うのであった。

テントの設営が終わり、ふたりはキャンプ椅子を並べて座り、寄り添って富士山を眺める。

「何度見てもでつかいばい、雄大さなら阿蘇も負けてないんやけどなー。」

「出た出た、熊本県民特有の負けず嫌い。」

「うっせ!」

くすくす笑う冬美にちよいへソを曲げて健吾が返す。社交性があり度胸が据わって

いる

健吾は多数と話すときは冬美をリードするが、ふたりきりの会話になると逆に冬美が健吾を

手玉に取るが多くなる。

「いよいよ3年かー、進路も考えんといかんよな。」

「大丈夫だつて、健ちゃんアタマいいんだし。」

そう言つてイスに座つたまま健吾に寄りかかり、その頬に頬をくつつける冬美。まるであの

ストラップのように頬をくつつけたこの体勢が彼女は好きだった。

――本栖高校野外活動サークルと海野高校ていぼう部、その交流は今後も続いていく――

ゆるキャン△+放課後ていぼう日誌のコラボ二次創作

『グビ姉vsビールバカ、霊峰富士の聖杯大決戦!』――おしまい――

あとかぎ

無事完結しました、映画ゆるキャン△と放課後ていぼう日誌（未来予想図）のコラボ

SS

「グビ姉vsビールバカ、霊峰富士の聖杯大決戦ー」いかがでしたでしょうか。

本作は前作の「グビ姉vsビールバカ、南海の大決戦」の続編にあたる物語ではありませんが

実は続編を書く予定は無かったんですよ。なにしろ「南海のく」がキレイに結末を迎えられた

というのもありますが、一番のネックはていぼう側が山梨に行くのは物語としてちよつと無理が

あつたんですよね。

キャンプならわざわざ遠方まで行かなくても九州で出来る（現に無人島や五島でいっぱい

やってる）し、野クルのみんなに会いに行くにしても、行ってキャンプしてご飯食べ

帰るだけじゃドラマ要素が薄いんですよ。ゆるキャン側が芦方に来たのは「釣り」という

彼女たちに縁の薄い一大イベントを挟むからこそ物語が成り立ったわけで。

しかし、そんな作者に可能性の塊が隕石となって降ってきました。そう、“映画ゆるキャン△”です。

なんとなんと、およそ10年後の物語！なでしこもリンも社会人!!しかもテーマが「キャンプ場を

作る！」というなかなかトンデモな物語でした。何より女子高生がキャツキャンプウフフ

してるのが売りの作品なのにまさかの大人編とは、なんとも思い切った物語にしたものです。

で、見終わった後、作者も当然のようにゆるキャンロスになりましたw

大人編が描かれたということはつまり、この後の物語を期待するのが困難になってしまったと

いう事でもありません。なのでゆるキャンの物語はもうここで終着点なのかと思うと・・・

あれ・・・じゃあ自分で書けばいいんちゃう？

そうですね、だったらまた書けばいいんですよ、グビ姉とビールバカの物語の続きを。映画版が多数のネタを投下してくれたことで芦方勢が山梨に行く理由なんて十二分にあるんだし！

彼女らで作ったキャンプ場、名物のダイヤモンド富士、雑誌社で悪戦苦闘するリン、そして

作者が描いた野クルとていぼう部の交流と絆。ここまで要素が揃ったらもうGOサイン決定です！

ちようど「南海く」の方の感想で「アラガミを喰らう艦息睦月改二」氏に「続編を見てみたい」

とのコメントを頂戴し、そのレスに「ならタイトルは「グビ姉vsビールバカ、霊峰富士の

聖杯決戦」かな」と返していたこともあって、そのままその表題を採用しました。

元々グビ姉とビールバカのタイトルで読者を釣る気満々（オイ！）だったこのシリーズ、

それなら飲酒のシーンを使ったフォトコンテストで盛り上げるというアイデアを思いついて、

そこからリンが雑誌ライターだという設定を生かして、ゆるキャン世界の有名誌“ピ

パーク”を

ネタにして彼女の成長をドラマにしたら面白そうだという発想でスタートしました。

そこからはアイデアがポコポコ湧いてきましたね。ゆるキャン＋といぼう日誌なら飯テロは

必須だし、10年後のといぼう部OGの成長と現状を描くために、みんな一緒にやなくて個別に

山梨に旅させることで、うまく自然に今の陽渚たちの姿を表現出来たかと思います。

で、一番の追加要素として浮かんだのが、鳥羽先生と小谷先生のお子さんを出そう、という

ものでした。なにせ原作の10年後ならもう結婚してないとさすがに婚期アウトなわけで、なら

みんな大人になったんだし、にぎやかし役に子供が居ると面白いかなと思ったんです。

で、だったらいつそ男の子と女の子にして、恋愛をほのめかす関係にしてみました。作者は

いわゆる美少女動物園ものも大好きですが、初々しいカップルものも大好物なんですよ。

そうして誕生したのがガッツリ九州男児な健吾君と、やや引つ込み思案な冬美ちゃんなんです。

この性格分けは勿論健吾が冬美をぐいぐい引つ張っていく展開を書きたかったからです。まあ

男女逆でも良かったんですけどねw

なでしこ達や陽渚達に相手役の男性を出すのではなく、ずっと下の世代にカップルを置くことで

両作品の雰囲気や損なわずにラブコメを成立させるのに大いに役立ってくれました。

反面失敗したのがフォトコンテストです。よく考えたら漫画やアニメと違って文章で

写真うつりを読者諸氏に想像しろったって無理な話ですよね・・・なので終盤の19話と20話には

下手なりに雰囲気や察して貰おうと挿絵祭りになりました。おかげで時間がかかってしまっ

て更新が著しく滞ってしまい申し訳ありませんでした。

ビバークの木村氏は別作品「からかい上手の高木さん」の木村君がモデルになつてます。

こちらにも健吾君同様、ゆるキャンやていぼう日誌のキャラと恋愛関係にならないキャラなのが

大きかったです。ビジュアルこそアレですがホントいい奴なんですよね、彼。あちらの映画版で

カメラにハマってたのもいい要素でした。

本作品ではひそかに脇役好きな作者として、あかりちゃんや綾ちゃん、ゆらさんを出せたのは

嬉しかったです。3人とも脇役とは思えない個性持ちで物語を紡ぐのに大いに活躍して

くれました。もちろん前作から続く赤井店長とリンのお爺ちゃんの活躍も描けて良かったです。

さあそして嬉しいことに、ゆるキャン△の3期が決定しました！執筆中にこのニュースを

聞いたことも本作を書く大きなモチベーションになりましたよ。

あとはていぼう2期を・・・ここからが面白くなるんですから（切実）

次回作はまだ未定ですが、そろそろオリジナルにも手を付けてみようかなと思ってます。

作者はジャンルにあまりこだわりがなく、書いてきた二次創作もジャンルもバラバラなので

どの方向で行くかはまだまだ未定ですが、いつか皆様のお目に触れればいいなと思っています。

それでは、お付き合い頂いてありがとうございます。

— 三流FLASH職人